



国立大学法人
東京医科歯科大学

Bloom!

【特集号】

東京医科歯科大学
医学部
80年史

Tokyo Medical and Dental University, Faculty of Medicine

東京医科歯科大学 医学部

Since 1944 **80** 年史
th Anniversary



国立大学法人
東京医科歯科大学

発行 国立大学法人東京医科歯科大学
〒113-8510 東京都文京区湯島 1-5-45
www.tmd.ac.jp
2024年8月

東京医科歯科大学広報誌『Bloom! 医科歯科大』特別号

「知と癒しの匠」を創造する 医科歯科大
Bloom!

【特集号】

東京医科歯科大学 医学部80年史

C O N T E N T S



挨拶

04

田中 雄二郎 学長

06

東田 修二 医学部長

07

藤井 靖久 東京医科歯科大学病院 病院長

08

福井 小紀子 大学院保健衛生学研究科長

09

角 勇樹 大学院保健衛生学科長

09

依田 哲也 歯学部長

10

檜枝 光憲 教養部長

影近 弘之 生体材料工学研究所 所長

仁科 博史 難治疾患研究所 所長

歴史

12

医学部80年のあゆみ

24

歴代の医学部長

26

歴代の東京医科歯科大学 病院長

28

医学部医学科の概要

30

保健衛生学科の概要

32

東京医科歯科大学病院の概要

研究分野 紹介

35

大学院医歯学総合研究科

59

大学院保健衛生学研究科

63

寄附講座及びジョイントリサーチ講座

寄稿

72

林 洋 医科同窓会 理事長

73

佐々木 吉子 お茶の水会看護同窓会 会長

74

関 貴行 お茶の水会検査同窓会 会長

基本データ

76

医学部

77

建物配置図



医学部80周年を迎えて ～東京科学大学への新たな出発へ～

この度、東京医科歯科大学医学部は創設80周年を迎えることとなりました。

これもひとえに、長年にわたりご支援、ご協力を賜りました皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

東京医科歯科大学医学部は、1944年に設立されて以来、医療の発展と人材育成に尽力してまいりました。これまでの80年間、数多くの優れた医師、研究者、教育者を輩出し、国内外で高い評価を受けております。私たちの使命は、常に最先端の医療技術と知識を提供し、患者さん一人ひとりに寄り添った医療を実現することです。

振り返れば、私が医学部医学科に入学したのは1974年で、関連病院や米国留学の期間計6年を除いても、人生の半分以上をここで過ごしていることになります。入学当初、生協は木造の建物で、今の病院や、3号館、M&Dタワーなど全て無かった時代です。したがって、本学の発展の歴史を見てきたとも言えます。その中でも特筆すべきは、1989年の保健衛生学科の新設、1999年の大学院大学への転換、2002年から始まったハーバード大学と提携した医学教育改革等が挙げられます。即ち本学医学部は、日本の医学の発展に大きな役割を果たしてきたのです。特に、国難、世界難でもあった2020年からのコロナ禍では、医学部が附属病院や他の部署と力を合わせ大きな貢献をし、東京の医療崩壊阻止の一翼を担ったことは誰も否定できないことです。

これらの延長線上に、2022年の指定国立大学法人の指定、今年の東京工業大学との統合があります。

2024年10月1日に誕生する東京科学大学「Institute of Science Tokyo」の理念は、「『科学の進歩』と『人々の幸せ』とを探究し、社会とともに新たな価値を創造する」としました。この統合により、医療と工学の融合が進み、革新的な医療の開発や新しい教育プログラムの創設が期待されます。これからの時代に求められる医療人材を育成し、社会に貢献するための基盤がさらに強固になると確信しています。

80周年という節目を迎え、私たちはこれまでの歩みを振り返りつつ、未来に向けて新たな挑戦を続けてまいります。医療の現場は日々進化し、私たちに求められる役割も変化しています。しかし、どのような時代であっても、患者さんの健康と福祉を最優先に考える姿勢は変わりません。

最後に、これまでのご支援に改めて感謝申し上げますとともに、新しく「東京科学大学(呼称Science Tokyo)」となりましても変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

東京医科歯科大学 学長

田中 雄二郎

Yujiro Tanaka

1980年3月東京医科歯科大学医学部医学科卒業、1985年同大学大学院医学研究科博士課程修了後、同大学医学部附属病院第二内科医員。1986年米国マウントサイナイ大学附属アルコール研究医療センターリサーチフェロー。1991年東京医科歯科大学医学部附属病院第二内科助手等を経て、2001年同大学医学部附属病院総合診療部教授に就任。2006年同大学大学院医歯学総合研究科臨床医学教育開発学分野教授に配置換え。同大学学長特別補佐、医学部附属病院副院長、病院長、理事・副学長を歴任し、2020年4月学長に就任。



医学部長

東田 修二

Shuji Tohda

医学部創立80周年を迎え、医学部長として、また一卒業生として、大変悦ばしく感じております。創立以来、現在の世界に冠たる医学部への発展に寄与されました全ての教職員、同窓生、関係者の皆様に感謝申し上げます。

本学医学部は、1928年に設立された東京高等歯科医学学校に、医学科が1944年に設置されて誕生しました。1946年に東京医科歯科大学に昇格して医学部となり、1989年には医学部に保健衛生学科が設置され、国立大学として初の4年制の看護学と検査技術学の高度医療技術職を育成する大学となりました。1999年からは大学院重点化が進み、2022年には指定国立大学法人になりました。指定国立大学法人とは、世界最高水準の卓越した教育研究活動を展開する大学として、文部科学大臣が指定した10大学を指します。本学医学部は世界をリードする医師、看護師、検査技師、研究者、教育者、医療行政職を育成してきました。

本学医学部の教育の特色は、高い研究力のある国際性豊かな医療人を育成するカリキュラムにあります。医学科では4年次のプロジェクトセメスター（研究室配属）で、約半年、研究に専念します。この期間に海外の大学に研究留学する学生もあり、2024年にはImperial College Londonに1年間留学して、両大学の学位を取得するコースも始まりました。臨床実習では選抜された6年生がハーバード大学教育病院など海外の病院で実習するコースが2004年から始まりました。一方、教員も2002年からコロナ禍前まで、約10名が8日間、ハーバード大学での授業に参加し、医学

教育を学び、ハーバード流の教育を本学に導入するコースが行われました。保健衛生学科ではセイナヨキ応用科学大学やチュラロンコン大学などに学生と教員の派遣を行ってきました。

本学医学部は研究においても、水島昇教授（現・東大教授）のオートファジー研究、横田隆徳教授の核酸医薬開発をはじめ、免疫学、腎臓病、運動器、炎症性腸疾患、再生医療など多くの領域で世界をリードする業績をあげました。この成果として、2024年のQuacquarelli Symonds大学ランキングの医学部門で世界128位に上昇しました。また、英国Times Higher Educationの学生数5,000名以下の小規模大学を対象としたランキングで、本学は日本で1位、世界で39位でした。

診療では2020年からの新型コロナウイルス感染症の蔓延に対して、当院は重症患者を都内で最も多く受け入れ、高い救命率をあげて、新知見を世界に発信しました。また、救命救急センターは重症患者の緊急手術や集中治療を一貫して診療し、全国救命救急センター評価の総合評価で全国第1位になった年もあります。このほか、消化器がんのロボット手術や近視治療も世界の最先端を走っています。

医学部創立80周年となる2024年は、本学が東京工業大学との統合により東京科学大学として新たに飛躍する年です。医学の専門家集団としての医学部から、異分野融合や医工連携を進め、工学やコンピュータサイエンスを取り入れた医学部への新たな展開を目指します。

1984年東京医科歯科大学医学部卒業、同附属病院第一内科医員、1985年横浜赤十字病院内科医師、1990年トロント大学オンタリオ癌研究所研究員、1994年東京医科歯科大学医学部第一内科助手、1999年同大学院医歯学総合研究科臨床検査医学分野助教授、2007年同准教授、2015年同教授、附属病院検査部長、2022年から現職



東京医科歯科大学病院 病院長

藤井 靖久

Yasuhisa Fujii

東京医科歯科大学医学部創立80周年、心よりお祝い申し上げます。医学部の基盤とも言える附属病院の発祥は、1944年4月に、お茶の水地区に設置された東京医学歯学専門学校附属医院であり、この時代には空襲による建物焼失にも見舞われております。初代、島峰徹先生をはじめ3代（島峰、長尾、檜垣の各先生）にわたる医院長が、確固とした礎を築くべく、終戦を挟んだ激動の時代を刻苦奮闘されました。

1949年6月、東京医科歯科大学医学部附属病院に改称され、初代病院長の川島健吉先生以後、25代（川島、藤井、柳、太田、川島、足立、島本、堀口、濱口、青池、稲葉、島菌、武内、渡邊、前沢、鈴木、大島、沼野、西岡、坂本、宮坂、田中、木原、大川、内田）の病院長の先生方が病院の発展に尽くされました。

2021年10月に医学部附属病院と歯学部附属病院が一体化し、東京医科歯科大学病院が誕生しました。病院の理念は「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」となりました。これは、医学と歯学の融合により相乗効果を発揮して、「頭から足先まで」トータルに全身を診ることで、今まで以上に患者さんの健康に貢献できる医療を提供するということを掲げたものです。

当院は一体化の前から社会貢献を使命とし、2020年からの新型コロナウイルス感染症に対して、高度な診療機能

を有する最後の砦として社会からの要請に応えるべく、東京医科歯科大学病院として初代病院長となった内田信一先生のリードのもと、病院一丸となって取り組みました。田中雄二郎学長が掲げた「力を合わせて患者さんと仲間たちをコロナから守る」をキャッチフレーズに、積極的にコロナ診療を行い、東京都内で最も多数の重症患者の入院診療を行いました。社会貢献の一環として災害医療も重視し、東日本大震災、熊本地震、能登半島地震等に加え、海外の災害現場にも多くの医療チームを派遣してきました。

2023年10月には、C棟（機能強化棟）が本格稼働しました。C棟はハイブリッド手術室、ICU/HCU、ER等、急性期医療提供機能の強化・充実を目的として構想されましたが、免震構造、非常用医療機器・発電機を有し災害時の診療拠点となる機能も持ち合わせています。

2024年10月には、東京医科歯科大学と東京工業大学は統合し東京科学大学が誕生し、当院も東京科学大学病院となります。医学と歯学のみならず理工学と融合することで当院はより高いレベルの医療を提供できると期待しています。東京科学大学病院としても、診療・教育・研究を通じて社会貢献を続けていきたいと存じます。

医学部創立80周年を迎えるにあたり、これまで本院のためにご尽力くださいました、数多くの諸先輩の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

1988年東京医科歯科大学医学部医学科卒業、同大医学部附属病院泌尿器科勤務、米国ピッツバーグ大学およびルイビル大学内分泌代謝学教室博士研究員、がん研究会有明病院泌尿器科副部長を経て、2016年8月より東京医科歯科大学大学院腎泌尿器外科学教授。2019年4月より東京医科歯科大学医学部附属病院（現在、東京医科歯科大学病院）副病院長（併任）、2023年4月より東京医科歯科大学病院病院長（併任）。



大学院保健衛生学研究科長

福井 小紀子*Sakiko Fukui*

医学部保健衛生学科長

角 勇樹*Yuki Sumi*

歯学部長

依田 哲也*Tetsuya Yoda*

教養部長

檜枝 光憲*Mitsunori Hieda*

東京医科歯科大学医学部創立80周年を迎えられることをお慶び申し上げます。

80年という長い歴史の中で、医学部保健衛生学科は1989年に国立大学としての初めて4年制の保健医療系学科として設置されて35年目を迎えました。当研究科では、医療とケアの高度化・多様化を見越し、リーダー校の1つとして看護学の確立を先駆的に展開し、学部卒業生に加えて臨床現場並びに教育研究の場で活躍する多くの大学院修了者を輩出し、看護学の発展と高度な医療の推進に寄与して参りました。

この10月には東京科学大学が誕生し、さらなる高度看護実践者の育成と世界に伍する教育研究者育成が大きなミッションとなります。これまでの先輩方が築き上げられてきた伝統と新たなイノベーションを組み合わせ、よりダイナミックな研究展開を進めるとともに、創意工夫を凝らした研究者および実践者の育成を目指した教育展開を強化していきたいと考えております。また、医学部医学科、検査技術学専攻、歯学部、そして統合する東京工業大学との連携を強化し、保健衛生学研究科看護学専攻として、看護学、医療全般、そしてヘルスケアへの発展と貢献を目指して一層の努力を惜しまない所存です。

80年の歴史を積み上げて来られた医学部の先輩方の意思と功績に敬意を払うとともに、時代の大きな変革を踏まえながら、さらなる発展を目指して新大学として新たなスタートを切りたいと考えます。

東京医科歯科大学医学部創立80周年を、教職員の一人として迎えられる栄誉に感謝するとともに、ここまで医学部を築いてこられた先輩諸氏に心より敬意を表します。

東京医科歯科大学という名称は本年10月で無くなり一抹の寂しさは覚えますが、東京工業大学と統合して東京科学大学となり、さらなる発展を目指すという未来志向でなければ時代に取り残されてしまうでしょう。

本学医学部保健衛生学科は1989(平成元)年に設置され、国立大学で初めての4年制の保健医療系学科としてスタートしました。医療の高度化と質の高いチーム医療遂行のために、医師以外の医療スタッフの資質向上と学問としての確立・発展が大きな目的であったようです。35年目を迎え、医学部保健衛生学科は十分当初の目的を達成し、看護学、検査技術学の発展を牽引する高度医療技術者、教育者・研究者のみならず、関連した医療分野の高度医療技術者を卒業生から輩出するようになりました。最近の保健衛生学科10年間を振り返ってみましてもどんどん変化してきています。「この世に生き残る物は、強いものでもなく、頭のいいものでもなく、変化に対応できる物だ」とよく言われております。保健衛生学科は勢いがあり、今後ともさらなる発展が期待されます。東京医科歯科大学関係者の皆様には安心されて頂くと共に、今後も御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

1993年東京大学医学部保健学科卒業、2000年東京大学大学院医学系研究科修了、2001年東京都立大学講師・准教授、2009年厚生労働省看護技官、2013年日本赤十字看護大学教授、2017年大阪大学教授、2020年東京医科歯科大学保健衛生学研究科教授、2022年から現職。

東京医科歯科大学医学部医学科1989年卒業、2009年東京医科歯科大学(旧組織)医学部附属病院診療科内科系診療科呼吸器内科講師、2014年大学院保健衛生学研究科生命機能情報解析学分野教授、2023年大学院医歯学総合研究科生命理工医療科学専攻生体検査科学講座生命情報応用学分野教授

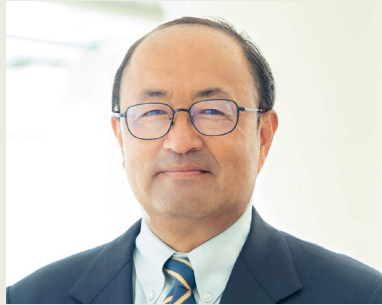
東京医科歯科大学医学部が創立80周年傘寿の節目の年を迎えられましたことは、誠に慶賀の念に堪えません。歯学部を代表して心よりお祝い申し上げますとともに、医学の教育、研究、臨床の殿堂として、今日の発展へと導いてこられた多くの関係者の皆様の弛まぬご努力に対しまして、改めて深甚なる敬意を表します。

医学科は1944(昭和19)年に創設され、1949(昭和24)年には、国立学校設置法により東京医学歯学専門学校から東京医科歯科大学に名称変更されました。今やブランドとして広く認知される「医科歯科」がここから始まったことになります。そして、75年後の本年に「医科歯科」の歴史は幕を閉じ、東京工業大学と統合した新大学、東京科学大学に生まれ変わります。「医科歯科」ブランドが消滅することは、寂しい感じもありますが、成長、出世とともに名前は変わるものでもあります。新大学のミッションは「科学の進歩」と「人々の幸せ」とを探索し、社会とともに新たな価値を創造することです。理学、工学との連携はもちろんですが、今まで以上に医学と歯学の連携も大事にして、「科学大」が新しいブランドになる様に、新しい伝統と歴史を切り開いていきましょう。ちなみに東京医科歯科大学としては2028年に創立100周年を迎えるはずでした。今後、医学部が90、100周年とさらなる発展を遂げられることを心より祈念申し上げます。

東京医科歯科大学医学部創立80周年を迎えられることを誠にしてお慶び申し上げます。本学教養部は、医学部創立から少し遅れての1965年に国府台に設置されました。しかしそのルーツは、本学が1946年に旧制大学へ昇格した時期、茨城県稲敷郡安中村に設置された大学予科にあります。その後、大学予科は1950年に他大学である千葉大学に移管されますが、1958年に国府台の地に本学の国府台分校が開設され、基礎教育から医学教育までのすべてを本学自身で行えるようになりました。そして1965年に部局(教養部)に昇格し、現在に至っております。ご存知のように2024年10月に本学と東京工業大学は統合し、新しく「東京科学大学」が発足します。両大学の教養教育組織も一体化し、国立大学で唯一残っていた教養部という名称も消滅する予定です。これからの教養教育は、理工系の学生さん達と切磋琢磨しながら勉学に励む新しい時代に入っていくこととなります。

私達はまさにこの激動の歴史の中に身をおいています。両大学の強みである医療と理工学のコラボレーションによって、社会に対する新しい価値の創出や、地球規模の課題に対する解決法の提案など、相乗効果により何が生まれるのか。わくわくすると同時に、構成員としてその責任に身の引き締まる思いです。また、そのような価値を創造する若い担い手を育てていきたいと考えております。

1996年電気通信大学電気通信学部卒業。2001年電気通信大学電気通信学研究科修了。2001年ペンシルベニア州立大学理学部研究員、2003年名古屋大学大学院理学研究科助教、2008年名古屋大学大学院理学研究科講師を経て、2015年より東京医科歯科大学教養部教授。



生体材料工学研究所 所長

影近 弘之

Hiroyuki Kagechika

医学部が創設80周年を迎えられましたこと、誠に
めでございます。教職員ならびに同窓の方々
には心よりお祝いを申し上げます。1944年に東京医学歯
学専門学校医学科が設置されて以来、多くの卒業生を輩
出し、世界の医療の発展に多大な貢献をされてきたこと、
改めて敬意を表します。

生体材料工学研究所は、東京医科歯科大学（新制）が設
置された1951年に歯科材料研究所として設置され、当初
から薬品部等の研究部門が医学部との共同研究を行い、
多くの研究成果、そして製品を世に出してきました。最近
では、創薬シーズ開発推進室（旧・医療機能分子開発室）を
介して創薬を志向した共同研究が種々行われています。
教育面でも、医歯学総合研究科の改組により医歯学と生
命理工との融合教育を進めてきました。特に、医学部と生
命理工とで共同運用した「疾患予防グローバルリーダー養
成プログラム」（2014-2018年度）により共に大学院教育の
国際化に貢献できたと思っています。

高齢社会、コロナ禍による医療現場の危機等を背景に、
医療革新が望まれています。医療と理工の連携を一層強
化し、先進技術を迅速に医療応用する体制の構築が必須
です。東工大との大学統合は、その絶好の機会であり、医
学部が医歯工連携を主導することが期待されています。
生体材料工学研究所もこれまでの実績をもとに協力体制
を強化したいと考えております。医学部が今後ますます
ご発展されますことを心より祈念申し上げます。

1983年東京大学 薬学部 製薬化学科卒業、1985年東京大学 大学院薬学系研究科修
士課程修了、1985年東京大学 大学院薬学系研究科博士課程修了、1986年東京大
学 薬学部 助手、1999年東京大学 薬学部 助教授、2004年東京医科歯科大学 大学院
疾患生命科学部 教授、2012年東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 教授、
2020年東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 所長



難治疾患研究所 所長

仁科 博史

Hiroshi Nishina

医学部が創立80周年を迎えられましたこと、誠に
めでございます。教職員、ならびに同窓の方々
に心よりお祝い申し上げます。

医学部の教育は、その充実した内容の点で国内外から
高く評価されています。本学が掲げている「知と癒しの匠
を創造する」という理念を実現されています。

2020年から約3年間に渡り、我が国も新型コロナウイル
ス感染症（COVID-19）のパンデミックの被害を受けまし
た。その中で東京医科歯科大学病院はいち早く
COVID-19患者の受け入れ、都民の健康を最前線で守ら
れました。医療系総合大学として、その英断と行動力は後
世にまで語り継がれることと思います。

難治疾患研究所は、7つの医学部附属研究施設を統合・
再編成することで設置された弟分の組織であり、昨年50
周年を迎えました。優れた医学研究者を育てることは世
界的に重要な問題となっています。本学の医学部教育を
受け、難治疾患研究所で研鑽することで、このような人材
の育成ができればと心から願っています。

本年10月に本学は東京工業大学と統合し、『「科学の進
歩」と「人々の幸せ」とを探究し、社会とともに新たな価値
を創造する』というミッションのもと、先駆者として、社会
とともに新たな価値を創造し、科学の可能性を拡張するこ
とを目指します。医学部が、今後も世界有数の医学部とし
てさらなる発展成長を遂げられますことを祈念して、お祝
いの言葉とさせていただきます。

1985年東京大学理学部生物化学科卒業、1990年東京大学大学院理学研究科修了、
東京工業大学生命理工学部助手、1995年トロント大学オンタリオ癌研究所博士研
究員、1997年東京大学薬学部助手、1998年東京大学薬学部助教授、2005年東京医
科歯科大学難治疾患研究所教授、2020年から現職。

歴史

History 東京医科歯科大学医学部創立50年までのあゆみ

1944-1950

萌芽期 東京医学歯学専門学校～ 東京医科歯科大学(旧制)

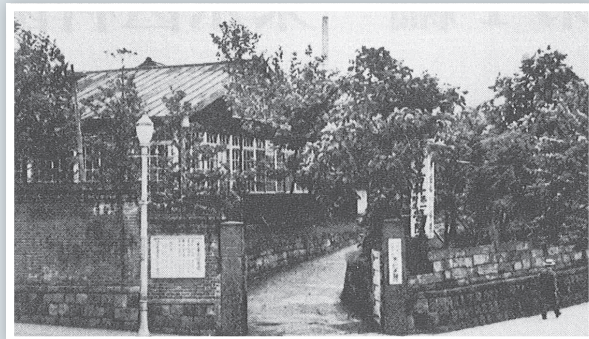
1944年戦況が日増しに劣勢に傾く中、東京高等歯科医学校に医学科が新設され、東京医学歯学専門学校と校名が変更された。これにより、医学部が誕生することとなった。はじめは、旧制中学卒業生(4年コース)と歯科医師からの編入者(2年コース)が学ぶこととなったため、医学科の第1回と第2回の卒業生(M1、M2と呼ばれる)は歯科医師であった。1946年に、(旧制)東京医科歯科大学が設立され、同時に予科が設置された。1946年10月26日に入学式が行われ、茨城県稲敷郡安中村(現美浦村)で予科教育が始まった。1950年には予科が千葉大学に移管され、千葉大学東京医科歯科大学予科となった。東京医学歯学専門学校は、1950年に医学科第4回生が卒業して廃止となった。また、同年に看護学校の前身である医学部附属厚生女学部が設置された。

東京が空襲にさらされる中、大きな煙突のある旧本館を除き、本校の木造建物はほとんどが消失してしまった。1945年には一部を疎開させ医学科諏訪分院が開設された(1946年に閉鎖)。戦後に軍用施設が教育施設へ転用されることとなり、それらを利用して1947年には附属医院の霞ヶ浦分院と国府台分院が設置されることとなった。そして、1950年には本校に附属病院外来棟が竣工となった。

1944年 4月	1945年 5月	9月	1946年 3月	4月	8月	8月	1947年 5月	11月	1948年 3月	1949年 3月	4月	1950年 3月	4月	4月	11月
医学科が新設され東京医学歯学専門学校と校名を変更	医学科第1回生(M1・歯科医師の編入)卒業 (1946年閉鎖)	医学科第1回生(M1・歯科医師の編入)卒業	旧本館西側に校舎2棟を建設	看護婦養成科が修業年限2年の指定学校となる	(旧制)東京医科歯科大学設立	東京医科歯科大学医学部の第1回生が入学	附属医院霞ヶ浦分院設置	附属医院国府台分院設置	医学科第2回生(M2・歯科医師の編入)が卒業	旧制大学予科を修了した第1回生が学部に入学	医学部第3回生(M3・旧制中学からの進学者)が卒業	医学部第4回生(M4)が卒業し東京医学歯学専門学校廃止	予科が千葉大学に移管され千葉大学東京医科歯科大学予科となる	医学部附属厚生女学部設置(看護学校の前身)	附属病院外来診療の建物が竣工



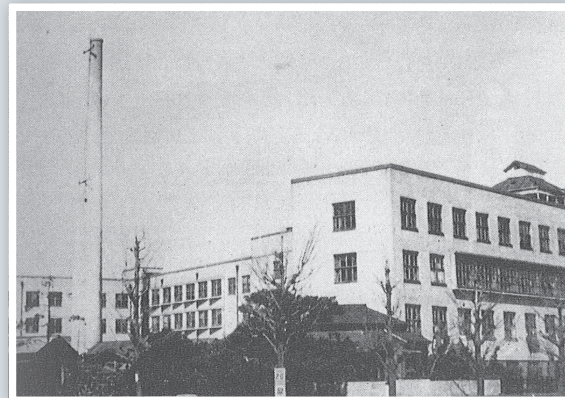
開校直後の校舎全景(1929年)



東京高等歯科医学校第一附属医院(1939年)



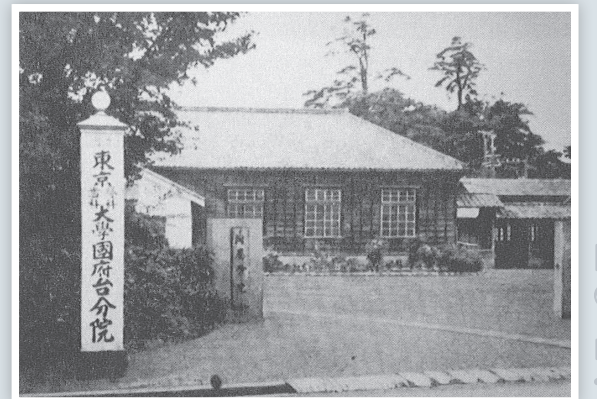
1944年頃の教員と生徒(M1)



東京医学歯学専門学校



東京医科歯科大学(旧制)予科



東京医科歯科大学附属医院国府台分院(1947年頃)



医学部附属病院外来棟(1950年)

History 東京医科歯科大学医学部創立50年までのあゆみ

1951-1975

確立期

東京医科歯科大学(新制)～
難治疾患研究所設置

1951年 4月	1953年 3月	3月	4月	8月	1954年 4月	1955年 4月	1956年	1958年 4月	1959年 8月	1961年 4月	1962年 3月	4月	4月	1965年 3月	3月	4月	1967年 2月	1969年 4月	1971年 8月	1972年 4月	5月	1973年 9月	1975年 3月
(新制)東京医科歯科大学設置	国立大学設置法により、 第1回生卒業式	国府台分院外来2号館が火災で 焼失	(旧制)大学院医学研究科設置	医学部附属農村厚生医学研究 施設を霞ヶ浦分院に設置	医学部附属難聴研究施設設置	(新制)大学院医学研究科設置	一ツ橋分院(旧東京高等歯科医 学校第二附属医院)閉院 (1943年より)	医学部附属硬組織生理研究施設 設置	8階建ての医学部附属病院 第1病棟竣工	医学部附属遺伝病研究施設設置	医学部附属病院第2病棟 (579床)竣工	医学部附属心臓血管病研究施設 設置	医学部附属衛生検査技師学校 (2年制)設置	附属病院中央診療室及び研究室 (旧3号館の一部)竣工	附属病院国府台分院廃院	国府台分校が廃止されて 教養部となる	附属病院外来・中央診療棟竣工	医学部附属内分泌腫瘍研究施設 設置	医学部附属看護学校校舎竣工	医学部附属動物実験施設設置	医学部附属臨床検査技師学校 (3年制)設置(衛生検査技師学 校の改組)	医学部附属の7研究施設を統合 して難治疾患研究所設置	駿河台地区に難治疾患研究所の 建物が竣工

1951年国立大学設置法により新制東京医科歯科大学が設置された。1953年に旧制東京医科歯科大学の第1回生が卒業するのに合わせて旧制大学院医学研究科が発足した。さらに、1955年に新制大学の学部生の卒業に合わせて新制大学院が発足し、新制大学医学部としての体裁が整った。1955年に千葉大学文理学部内に本学医学歯学進学課程が設置され、1958年に国府台分校に移された。さらに1965年には国府台分校は教養部となった。

1956年に、1943年より診療が行われていた一ツ橋分院(旧東京高等歯科医学校第二附属医院)を閉院した。このころより新しい医学部附属病院や研究棟の整備が行われ、1959年に8階建ての第1病棟、1962年に第2病棟、1965年に中央診療棟及び研究棟(旧3号館の一部)、1967年に外来・中央診療棟が竣工した。一方、1965年に国府台分院は廃院となった。

1953年から1969年にかけて設置された医学部附属の7研究施設(農村厚生医学、難聴、総合法医学、硬組織生理、遺伝病、心臓血管病、内分泌腫瘍)が統合され、1973年に難治疾患研究所が設置された。

1962年に医学部附属衛生検査技師学校(2年制)が設置され、1972年には医学部附属臨床検査技師学校(3年制)に改組された。



1950年頃の大学および駿河台周辺



1960年頃の医学部病棟(左)と外来(右)



医学部附属病院中央診療棟および研究棟(1967年)



1号館(管理棟)の竣工



湯島方面から見た東京医科歯科大学(1967年)

History 東京医科歯科大学医学部創立50年までのあゆみ

1976-1994

発展期 講座の新設、附属病院の充実～医科新棟竣工

研究棟や附属病院の整備を行うとともに、医学科の講座の新設も行われた。1975年に附属病院に分娩部が設置され、1976年には医学部附属家族性ポリボージス解析センターが設置された。そして、生化学第2講座（1978年）、神経内科学講座（1979年）、胸部外科学講座（1981年）、臨床検査医学講座（1983年）が設置された。

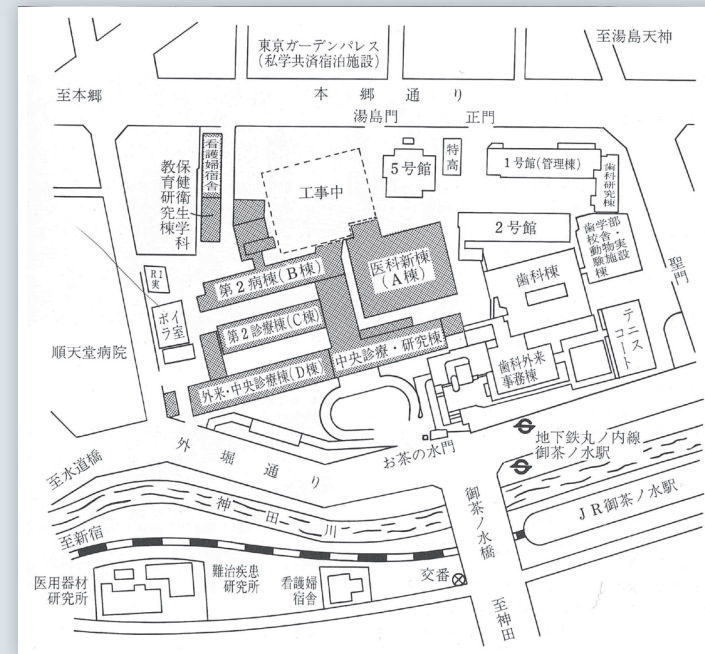
附属病院は1978年に第2診療棟が竣工し、行われてきた整備がひとまず完了したといえる。しかし、診療科の新設や施設の老朽化などにより、新病棟建設の計画が練られた。1991年に地上17階、地下4階の医科新棟（A棟）が竣工し、それにより外來の患者数が増加し、さらに入院患者数の増加も見られるようになった。

1989年に医学部保健衛生学科（看護学専攻、検査技術学専攻）が設置された。1991年に医学部附属看護学校および医学部附属臨床検査技師学校が廃止されるのに伴い、附属学校の4年制大学への移行が完了した。1993年に大学院医学研究科を医学系研究科に改称し、保健衛生学専攻（修士課程）が設置された。1995年には同専攻に博士課程が設置され、21世紀にむけての看護教育および臨床検査教育における教育者、研究者、指導者を育成するという理念の実現に近づいたといえる。



5号館（厚生棟）の落成

1976年 5月	1978年 3月	4月	1979年 4月	1981年 4月	1983年 4月	4月	1989年 4月	5月	1991年 3月	3月	1993年 4月	4月	1994年 7月
医学部附属家族性ポリボージス解析センター設置	第2診療棟が竣工	生化学第2講座新設	神経内科学講座新設	胸部外科学講座新設	臨床検査医学講座新設	ポリボージス陽疾患研究センター設置（医学部附属家族性ポリボージス解析センター廃止）	医学部附属学校（看護学校、臨床検査技師学校）の4年制大学への移行を前提として医学部保健衛生学科が設置された	医学部保健衛生学科第1回生が入学	医科新棟（A棟）が竣工 地上17階、地下4階の学校廃止	医学部附属看護学校及び医学部附属臨床検査技師学校廃止	大学院医学研究科を医学系研究科に改称し、保健衛生学専攻（修士課程）が設置された	疾患遺伝子実験センター設置	附属病院が特定機能病院の名称の承認を受ける



大学建物配置図(1992年)

1992



医学部附属病院外来ロビー

写真で振り返る 医学部創立50年以降のキャンパスと出来事

世界へ飛翔する次世代

大学へ

1994-2024

1994年の医学部創立50年から30年が経過した。その間も医学部は、年月とともに変化する時代の要請に応えるべく「教育」「研究」「診療」の3つの分野においてそれぞれ改革を進めてきた。並行してこれらを支える建物や施設などの環境の整備も進んでいる。毎年多くの高度先進医療を担う人材を育成しているキャンパスの直近30年を振り返る。



医学部附属病院B棟が完成し診療を開始。前年の1995年には、本学医学部出身者で初めて鈴木章夫先生が学長に選出された。

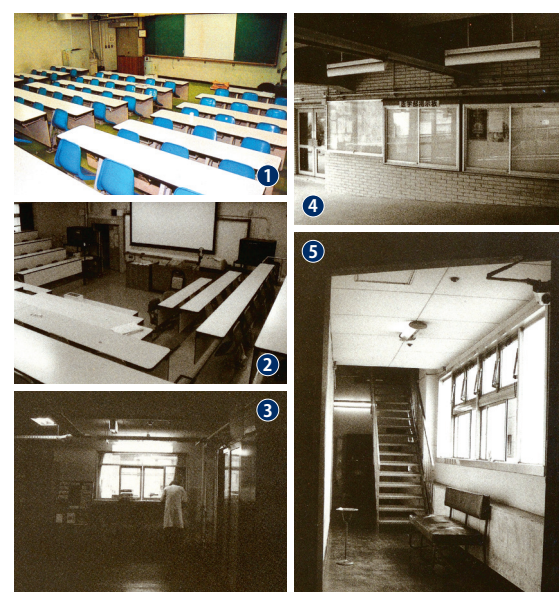


新3号館の地中基礎工事が始まる。大学院重点化により、医歯学総合研究科、保健衛生学研究科を整備。東京工業大学、一橋大学、東京外国語大学と本学による四大学連合憲章を締結し「複合領域コース」がスタート。

1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003



医学部創立50年頃。1991年に完成した医科A棟がそびえ立つ。



将来の日本の医療を担う学生たちが日々切磋琢磨する場だった
①新1講堂 基礎医学の講義などが行われていた②臨床第2講堂 臨床医学の講義はここで③教務課の窓口 学生生活を送るうえでお世話になった④旧3号館外の掲示板 休校情報もアルバイト情報も当時はこれが情報源⑤新1講堂横の廊下 休み時間にはここで友達とリフレッシュ



新3号館建設のため第2病棟が解体され更地となる(上)。第2病棟解体の様子(右)。



新3号館完成間近。ハーバード大学との医学教育提携によるカリキュラムがスタート。1回目となる教員を派遣。



写真で振り返る 医学部創立50年以降のキャンパスと出来事



国立大学の独立行政法人化により国立大学法人東京医科歯科大学が誕生。ハーバード大学との医学教育提携カリキュラムに学生を派遣、現地での臨床実習が始まる。新3号館の壁面が見える貴重な一枚。

2004

2005

2006

2007

2008

2009

2010

2011

2012

2013



本学のみならずお茶の水のランドマークとなるM&Dタワーの建設が進む。



M&Dタワーの南側鉄骨工事。医学部附属病院にERセンターが開設。



M&Dタワーの前面の工事が進む。救命救急センター(ER)に認可される。



旧3号館がすべて取り壊され、M&Dタワー前の駐車場工事が進む。翌2013年に駐車場屋上庭園「知と癒しの庭」が完成した。



旧3号館の解体が進み、附属病院前の一部を残すのみとなる。3月11日に発生した東日本大震災では被災地に医師や看護師を派遣、附属病院からは災害派遣医療チームが出動した。

M&Dタワー完成間近。研究分野の枠組みを越えた基礎・臨床の融合および医学・歯学の連携の環境が整う。地上26階、126mの超高層研究棟最上部にはLED照明による大学名とシンボルマークが点灯し、24時間稼働する医療の最先端拠点としての存在感を示した。

写真で振り返る 医学部創立50年以降のキャンパスと出来事



文科省の研究大学強化促進事業支援対象となりリサーチ・ユニバーシティ推進機構が発足、「スーパーグローバル大学創成支援」(タイプA:トップ型)の支援対象機関に採択された。



手術支援ロボットダビंचの導入
多数の手術で使用されている。

基本合意書を締結

国立大学法人 東京医科歯科大学(田中雄二郎学長)と国立大学法人 東京工業大学(益一哉学長)は、両法人並びに両法人がそれぞれ設置する東京医科歯科大学と東京工業大学を統合し、1法人1大学とすることについて合意に達し、10月14日に基本合意書を締結した。



C棟(機能強化棟)完成

地下2階は東京メトロ御茶ノ水駅のホームと直結し、1階のホールにはカフェやギャラリーを設け、大学や病院を来訪する人だけでなく、電車の利用客や街を歩く人たちが気軽に待ち合わせなどに利用できるオープンスペースにしている。大学の新たな象徴として、地域・世界と大学・病院との接点にしたいと考えている。

2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024

医学部附属病院のヘリポートが完成、大型ヘリコプターの離着陸が可能に。東京都の災害拠点病院としてさらなる医療の向上を目指す。



新型コロナウイルス対策を施したプレハブCT室を備えたコロナ外来診療センターを設置し、2020年9月17日(木)から稼働を開始した。



「医学部附属病院」と「歯学部附属病院」が一体化し、東京医科歯科大学病院となった。

 Institute of
SCIENCE TOKYO

10月 東京医科歯科大学と東京工業大学が統合し東京科学大学となる。



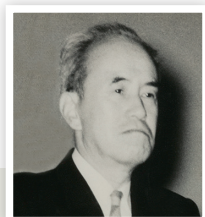
左/医学科講義室1
2011年度から始まった医歯学融合教育のために160人収容できる大教室
右/医学科講義室2
アクティブラーニングに対応できる環境が整う。

歴代の医学部長

医学部は医学科と保健衛生学科で構成されている。

医学部では学生が学術的・臨床的知識を習得するとともに、

研究意欲に富み、優れた人格と洞察力を持つ医療人に育つよう努めている。



初代
宮本 璋 (みやもと あきら)
1949年4月～51年3月



第2代
北 博正 (きた ひろまさ)
1951年4月～53年3月



第3代
古畑 種基 (ふるはた たねもと)
1953年4月～56年3月



第4代
宮本 璋 (みやもと あきら)
1956年4月～59年3月



第5代
岡田 正弘 (おかだ まさひろ)
1959年4月～61年6月



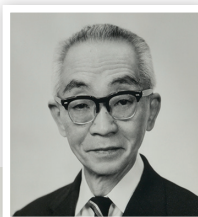
第6代
清水 文彦 (しみず ふみひこ)
1961年7月～64年6月



第7代
勝木 保次 (かつき やすじ)
1964年7月～67年6月



第8代
北 博正 (きた ひろまさ)
1967年7月～68年3月



第9代
落合 京一郎 (おちあい きょういちろう)
1968年3月～70年4月



第10代
濱口 榮祐 (はまぐち えいすけ)
1970年4月～75年4月



第11代
吉田 久 (よしだ ひさし)
1975年4月～77年7月



第12代
加納 六郎 (かのう ろくろう)
1977年8月～80年7月



第13代
前田 博 (まえだ ひろし)
1980年8月～83年7月



第14代
中尾 真 (なかお まこと)
1983年8月～86年7月



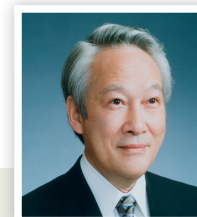
第15代
中谷 林太郎 (なかや りんたろう)
1986年8月～89年7月



第16代
大塚 正徳 (おおつか まさのり)
1989年8月～92年7月



第17代
鈴木 章夫 (すずき あきお)
1992年8月～95年3月



第18代
佐藤 達夫 (さとう たつお)
1995年4月～01年3月



第19代
廣川 勝昱 (ひろかわ かついく)
2001年4月～04年3月



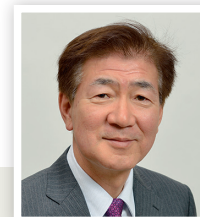
第20代
小池 盛雄 (こいけ もりお)
2004年4月～06年3月



第21代
大野 喜久郎 (おおの きくお)
2006年4月～11年3月



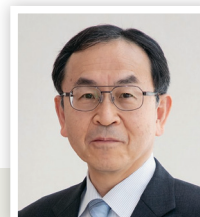
第22代
湯浅 保仁 (ゆあさ やすひと)
2011年4月～14年3月



第23代
江石 義信 (えいし よしのぶ)
2014年4月～16年12月



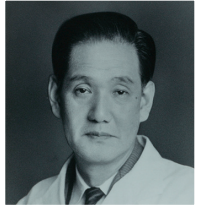
第24代
北川 昌伸 (きたがわ まさのぶ)
2017年1月～22年3月



第25代
東田 修二 (とうだ しゅうじ)
2022年4月～

歴代の東京医科歯科大学 病院長

最先端の知と技と助け合いの心で、最善の医療を目指す東京医科歯科大学病院。
 当院の礎は、初代附属医院長であり東京高等歯科医学校の創立者・島峰徹先生や
 2代目附属医院長の長尾優先生らによって築かれ、その崇高な精神は今も脈々と引き継がれている。

	初代附属医院長 島峰 徹 (しまみね とおる) 1944年4月～45年2月		第2代 長尾 優 (ながお まさる) 1945年2月～46年3月		第3代 檜垣 麟三 (ひがき りんぞう) 1946年4月～49年5月
	初代附属病院長 川島 健吉 (かわしま けんきち) 1949年6月～51年3月		第2代 藤井 久四郎 (ふじい きゅうしろう) 1951年4月～53年3月		第3代 柳 金太郎 (やなぎ きんたろう) 1953年4月～56年3月
	第4代 太田 敬三 (おおた けいぞう) 1956年4月～60年3月		第5代 川島 健吉 (かわしま けんきち) 1960年4月～63年3月		第6代 足立 忠 (あだち ただし) 1963年4月～66年3月
	第7代 島本 多喜雄 (しまもと たきお) 1966年4月～67年2月		第8代 堀口 申作 (ほりぐち しんさく) 1967年3月～70年2月		第9代 濱口 榮祐 (はまぐち えいすけ) 1970年3月～70年4月
	第10代 青池 勇雄 (あおいけ いさお) 1970年4月～72年7月		第11代 稲葉 稜 (いなば ゆたか) 1972年7月～75年7月		第12代 島蘭 安雄 (しまぞの やすお) 1975年7月～78年7月

	第13代 武内 重五郎 (たけうち じゅうごろう) 1978年7月～81年7月		第14代 渡邊 勲 (わたなべ いさむ) 1981年7月～84年7月		第15代 前沢 秀憲 (まえざわ ひでのり) 1984年7月～87年7月
	第16代 鈴木 章夫 (すずき あきお) 1987年7月～92年7月		第17代 大島 博幸 (おおしま ひろゆき) 1992年8月～98年7月		第18代 沼野 藤夫 (ぬまの ふじお) 1998年8月～01年3月
	第19代 西岡 清 (にしおか きよし) 2001年4月～04年3月		第20代 坂本 徹 (さかもと とおる) 2004年4月～11年3月		第21代 宮坂 信之 (みやさか のぶゆき) 2011年4月～13年3月
	第22代 田中 雄二郎 (たなか ゆうじろう) 2013年4月～14年3月		第23代 木原 和徳 (きはら かずのり) 2014年4月～16年3月		第24代 大川 淳 (おおかわ あつし) 2016年4月～20年3月
	第25代 内田 信一 (うちだ しんいち) 2020年4月～23年3月		第26代 藤井 靖久 (ふじい やすひさ) 2023年4月～		

「最先端の医学・医療の現場で学修し、Clinician Scientist, Scientific Clinicianの育成を目指す」

本学のミッションは、「知と癒しの匠を創造する」であり、教育理念として「幅広い教養と豊かな感性を備えた人間性の涵養」、「自己問題提起、自己問題解決型の創造的人間の養成」と「国際性豊かな医療人の養成」を掲げてきました。本学医学科ではこの理念のもと、Clinician Scientist (CS), Scientific Clinician (SC) の育成を目指しています。我が国の医学部で必要とされる学修内容である医学教育モデル・コア・カリキュラムに加え、将来CS, SCとして活躍するために必要な能力 (competence) は卒業時コンピテンシーに纏められ、医学科の学修成果 (アウトカム) として規定されています。

2011年より、卒業時コンピテンシーに基づく学修成果 (アウトカム) 基盤型教育をわが国でいち早く導入し実施してきました。日本医学教育

評価機構 (JACME) による医学教育分野別評価を2013年度、2021年度に認証評価を受け、国際水準以上の医学科として承認されています。

医学教育充実のため、2002年にはハーバード大学医学部 (HMS) と提携を結び、学生・教員の交流を行い、医学教育内容の見直しを継続的に進めてきました。2023年度からは新たなカリキュラムが開始され、今後も東京科学大学医学部医学科として医学教育の内容をさらにbrush upさせていく予定です。

研究マインドの育成

本学の教育ミッションの根本をなす部分であり、JACMEによる外部評価でも「科学的手法の原理および医学研究の手法を教育する機会が豊富に設定されている」と国内でも高い評価を得ています。

●プロジェクトセメスター

主な講義・試験及び基礎実習を終えた4年次に設定されている、最長6ヵ月の研究室配属コースとなっています。興味をもった分野について集中的に学ぶことにより、科学的視点を有する医師としての基盤を養成します。本学の諸講座、学外研究機関、国際交流協定校のインペリアルカレッジ (イギリス: ロンドン)、オーストラリア国立大学、ソウル大学、チュラロンコーン大学 (タイ) などにおける履修の機会も設定してきました。全学生の研究成果は、発表会の場においてプレゼンテーションが行われ、お互いに共有する機会を設けています。また、プロジェクトセメスターの研究成果を国内外の学会への発表、英文誌への論文文化も多く行われています。

●研究実践プログラム

研究に興味がある学生に、在学中

から積極的に研究に触れる機会をつくることを目的として作成されたプログラムです。本プログラムは医学科基礎系研究室、歯学系基礎研究室、生体材料工学研究所研究室、難治疾患研究所研究室が学生を受け入れ、通常カリキュラムの時間外に実際の研究を指導する選択実習科目です。研究実践プログラムは第2学年から第6学年まで履修することができ、学年縦断的に研究に携われるように設定しています。近年では毎年50～90人の学生が参加しています。

学修成果基盤型教育による臨床能力涵養

●クリニカル・クラークシップ

診療チームの一員として、患者さんの持つ複雑な臨床問題解決への主体的な参加を通して臨床知識・技術を習得し、プロフェッショナリズムを養います。最初の1年程度で、コアとなる診療科 (内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、集中治療医学など) をローテートし、基盤となる知識/技術/態度を徹底的に習得します。内科系など多くのプログラムで一定期間患者さんを担当し、回診では担当患者さんについてのプレゼンテーションを行い、方針決定の議論に主体的に参加をします。外科系プログラムでは、主治医によるインフォームドコンセントや手術にも立ち会います。コア診療科で基盤となる知識/技術/態度を習得した後、本大学病院のほか、学外教育病院や診療所、海外機関 (協定校など) での豊富な選択プログラムリストから、深く学びたい診療科、興味のある診療科などをローテートし、臨床問題管理能力・



図 診療参加型臨床実習

患者管理能力を高め、卒後臨床研修にむけたレディネスを高めています。

グローバル人材育成

●海外研究留学

一流の研究者の指導を受け、さらに世界中から集まって来ている研究室メンバーへのプレゼンテーションやディスカッションを行いながら、半年かけて研究プロジェクトを進めています。インペリアルカレッジロンドン (イギリス)、オーストラリア国立大学 (オーストラリア)、ネバダ大学リノ校 (アメリカ)、南カリフォルニア大学 (アメリカ)、マサチューセッツ工科大学 (アメリカ)、ガーナ大学野口記念医学研究所共同研究センター (ガーナ) などの本学の協定大学その他、ハーバード公衆衛生大学院、コロンビア大学、University College London、WHO Western Pacific Regional Officeで学生が研究を行ってきました。2024年度からはインペリアルカレッジのIntercalated Bachelor of Science (iBSc) コースへの留学も開始されています。

●海外臨床留学

臨床実習は、本大学病院や国内の病院・診療所のほか、海外の提携大学でも行われています。長期臨床実習 (最長12週間まで) では、ハーバードメディカルスクール (米国)、南カリフォルニア大学 (米国)、ヴァンダービルト大学 (米国)、オーストラリア国立大学 (オーストラリア) に臨床留学をしています。短期臨床実習 (2週間) では、国立台湾大学 (台湾)、国防医学院 (台湾)、マヒドン大学 (タイ)、チェンマイ大学 (タイ)、ソウル大学 (韓国) に留学することが可能となっています。

2023年度には長期臨床留学12名、短期臨床留学55名と、半数以上の学生が臨床留学を経験しました。

今後の医学・医療を見据えた新たな医学教育

2024年10月より東京科学大学が発足し、医学科では2028年度から新カリキュラムの開始が予定されています。今後も時代や社会と共に医学医療をリードする人材育成を進めてゆく予定です。



図 プロジェクトセメスター



看護学と検査技術学の各領域を深め 将来の教育者、研究者、指導者を育てる

看護学専攻と検査技術学専攻の 教育内容

1年次の前期を中心に開講される全学科共通科目の履修を経て、看護学専攻あるいは検査技術学専攻専門科目を履修します。

看護学専攻では、専門基礎分野の科目、基礎看護学や臨床看護学、公衆衛生看護学、在宅看護学などの専門領域別分野の科目、卒業論文などの専門共通分野の科目を履修します。講義、演習、臨地実習を通して学ぶことにより、看護職に必要な専門知識と技術、看護実践能力を身に付けます。看護学専攻卒業者は、学士の学位の他に、看護師国家試験受

験資格を取得することができます。また、選択制により保健師国家試験受験資格を取得することができます。保健師免許取得者は、必要な単位を修得することで養護教諭二種免許状も申請できます。このほか、国際的な研究や実践を担う力を高めるため、全学的な取り組みと同時に、各学年で外国語の授業を履修できます。さらに、大学院の教育科目の先取り履修制度によって学部生のうちから大学院の単位を修得することができます。

検査技術学専攻では、1年次後期より専門基礎分野の科目を学び始め、2年次には基礎医学・検査学、3年次には臨床医学・検査学、臨地実習、4

年次には総合講義などの専門分野の科目を講義・実習を通して系統的・段階的に学びます。その他にも多彩な選択科目があり、現代医療における臨床検査の役割を理解し、専門的知識と科学的思考能力を身に付けます。また3～4年次には病院での臨地実習に続いて、各研究分野での卒業研究や研究発表、論文作成を通じて学問的探究心を養います。検査技術学専攻卒業者は、学士の学位の他に、臨床検査技師国家試験受験資格を取得することができます。

看護学専攻の特徴

病院・施設・地域等の看護活動を包括的視野で捉え高度化と多様化する保健・医療・福祉の領域において学際的・国際的視野をもって様々な職種と連携・協働し、チームの中で看護の専門的役割を果たすと共に、看護学の発展に寄与する能力のある人材を養成することにあります。

検査技術学専攻の特徴

先端医療技術の進展に対応できる国際的・学際的視野と研究能力を備え、医学・保健医療における検査技術の発展に寄与し、新たな世代の指導にあたる臨床指導者・教育者・研究者として能力ある人材を養成することにあります。

【10年間の歩み】

大学院大学である本学は学部教育を大学院の教員が行うが、保健衛生学科は70年史の発行から10年の間に大きな組織変化がありました。2014年度から総合保健看護学専攻は5年一貫制博士課程「看護先進科学専攻」へと改組し、2018年度より生体検査科学専攻は、大学院医歯学総合研究科へ移動しました。領域の廃止や分野統合を経て、現在は看護学専攻は10分野、検査技術学専攻は6分野の大学院教員が有機的な連携のもと教育に当たっています。

分野構成（2014年度）

博士課程看護先進科学専攻		
講座	領域	教育研究分野
基盤看護開発学	看護ケア技術開発学	看護ケア技術開発学
	ヘルスプロモーション看護学	地域保健看護学
	看護学	地域健康増進看護学
臨床看護開発学	先端侵襲緩和ケア看護学	先端侵襲緩和ケア看護学
		精神保健看護学
		小児・家族発達看護学
	精神・人間発達看護学	リプロダクティブヘルス看護学
		ヘルス看護学
		在宅ケア看護学
先導的看護システム開発学	在宅がんエンドオブライフケア看護学	がんエンドオブライフケア看護学
		国際看護開発学
	国際的看護システム開発学	看護システムマネジメント学
	高齢社会看護ケア開発学	高齢社会看護ケア開発学

博士課程共同災害看護学専攻

生体検査科学専攻博士(前期・後期)課程	
講座	教育研究分野
生命情報解析開発学	分子生命情報解析学
	形態・生体情報解析学
	生命機能情報解析学
	生体機能支援システム学
分子・遺伝子応用検査学	先端分析検査学
	生体防御検査学
	分子病態検査学
	先端血液検査学
	先端生体分子分析学

分野構成（2024年度）

大学院保健衛生学研究科博士課程看護先進科学専攻	
講座	教育研究分野
基盤看護開発学	ヘルスサービスリサーチ看護学
	公衆衛生看護学
臨床看護開発学	成人看護学
	精神保健看護学
	小児・家族発達看護学
	リプロダクティブヘルス看護学
	在宅・緩和ケア看護学
先進的看護システム開発学	国際看護開発学
	看護管理・高齢社会看護学
	災害・クリティカルケア看護学

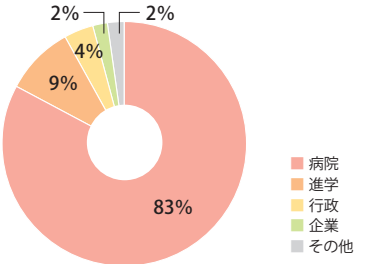
大学院保健衛生学研究科博士課程共同災害看護学専攻

大学院医歯学総合研究科博士課程生命理工医療科学専攻 大学院医歯学総合研究科修士課程医歯理工保健学専攻	
講座	教育研究分野
生体検査科学	形態情報解析学
	血液・生体システム解析学
	臨床分析・分子生物学
	生命情報応用学
	微生物・感染免疫解析学
	疾患生理機能解析学

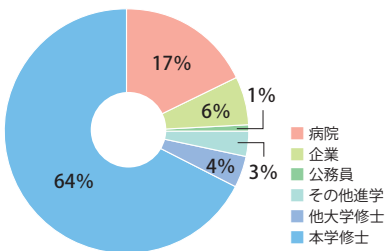
【卒業生の活躍】

保健衛生学科は1993年3月に第1回生が卒業して以来、多くの卒業生を輩出してきました。卒業生は臨床現場で看護師や臨床検査技師として活躍する者はもちろんのこと、行政や企業で修得した知識を活かす者や、研究の道に進み活躍する者、教育の道を歩み、大学教授として後進の育成に励む者など様々です。学士課程を修了した段階で多様な進路が開かれており、今後より一層様々な分野で卒業生が活躍していくことが期待されます。

看護学専攻 卒後進路



検査技術学専攻 卒後進路

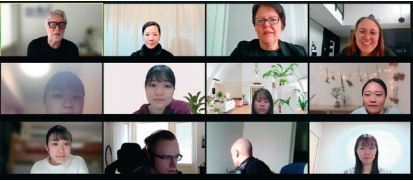


【コロナ禍の様子】

2019年度の年度末からパンデミックの影響を受け、オンラインでの講義や制限下での演習や実習が余儀なくされました。新しい方法で工夫を凝らした教育活動が行われました。



フェイスシールドを着用して実習を行う学生



遠隔国際交流プログラム

【海外研修・留学支援】

豊かな感性と国際性を兼ね備えた医療人育成の一環として、海外研修奨励制度の活用やその他の留学支援などにより、学生に海外研修の機会を提供しています。これまで英語圏の米国ほかに、アジアや北欧諸国などで多くの学生が貴重な経験を積んできました。特に海外提携大学である米国のワシントン大学では、学部・大学院講義の聴講、本学の学生のプレゼンテーション、附属病院の見学のみならず、新人看護師の技術演習への参加も含めた充実したプログラムを提供しています。検査技術学専攻では海外交流協定校であるチュラロンコーン大学（タイ）および台北医学大学（台湾）と学部学生・大学院生の充実した派遣・受入を行っています。また、ラオス、ガーナなどの開発途上国における医療、看護、臨床検査の現状を学び課題や解決策を考える短期研修も行っています。



ワシントン大学の学生、教員との集合写真

ラオス保健科学大学での医療技術支援活動に参加した様子

医学と歯学の、そしてこれからは理工学との融合、相乗効果でより高いレベルの医療を提供します

医学部附属病院は、2021年10月1日に歯学部附属病院との一体化により東京医科歯科大学病院となりました。病院が一体化したことで、多職種連携による、より良質な医療の提供、受診者に対する医療安全の向上、教育研修体制や治験・臨床試験支援体制の充実および各部門の集約化による業務の効率化など、これまで制度的にできなかったことが実現可能となりました。

また、2023年10月1日には病院の

新しい棟として、C棟（機能強化棟）の稼働が始まりました。C棟は急性期医療提供機能の強化・充実に目的として構想されましたが、免震構造、非常用医療機器・発電機を有し災害時の診療拠点となる機能も持ち合わせています。

医科と歯科の一体化や、C棟の完成によって、世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、また次代を担う優れた医療人の育成及び先進的な研究開発をおこなうことで、社会

に貢献していくことを目標としています。

また、東京医科歯科大学と東京工業大学は2024年10月1日に統合し「東京科学大学」に生まれ変わり、当院も「東京科学大学病院」になります。新大学は「イノベーション（技術革新）を生み出す多様性、包摂性、公平性を持つ文化」の実現を目指しますが、医学と歯学のみならず理工学と融合することで当院はより高いレベルの医療を提供していきます。

2021年10月に「東京医科歯科大学病院」がスタート！

旧東京医科歯科大学医学部附属病院（東京都文京区、病院長：内田信一）と、旧東京医科歯科大学歯学部附属病院（東京都文京区、病院長：水口俊介）は、2021年10月1日より一体化し、「東京医科歯科大学病院」としてスタートしました。

東京医科歯科大学は、「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」という理念に基づいて、開学以来、歯科・医科、二つの病院において、高度な医療の提供、医師および歯科医師等の育成、新たな医療技術の研究・開発を行ってまいりました。しかし、今後の高齢社会の進行による疾病構造の変化や、新型コロナウイルス感染症パンデミックのような新たな傷

病の出現を見据えて、口腔疾患と全身疾患の区別なく、トータル・ヘルスケアを実現することを大学の目標に定めました。

このような大学の目標を達成するために両病院が一つになり、医科・歯科を問わない診療科間の協力を可能にすることで、より高度で、安心安全な医療が提供できるものと考えています。「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」という理念のもとに、患者さん中心の良質な全人的医療、高度先進医療の開発と実践、人間性豊かな医療人の育成などの基本方針に則り、人々の信頼に応える社会に開かれた病院であり続けるために一体化

を実現しました。

東京医科歯科大学病院一体化記念式典が開催されました

2021年10月12日にM&Dタワー2階鈴木章夫記念講堂にて東京医科歯科大学病院一体化記念式典が開催されました。この式典は、病院の一体化を記念するものとして、大学創立記念日にあわせて開催されました。

記念式典は田中中学長からの挨拶にはじまり、大川医療担当理事（当時）の挨拶の後に、式典参加者らによる大学病院の新しい銘板の除幕式が行われました。最後に内田病院長（当時）が挨拶をし、式典は幕を閉じました。

東京医科歯科大学病院の理念

世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する

東京医科歯科大学病院の基本方針

- ① 患者中心の良質な全人的医療の提供
- ② 人間性豊かな医療人の育成
- ③ 高度先進医療の開発と実践
- ④ 人々の信頼に応える社会に開かれた病院



ハイブリッド手術室



免震構造



非常用医療設備



C棟



研究分野紹介

顎顔面頸部機能再建学講座

形成・再建外科学分野

DEPARTMENT OF PLASTIC AND RECONSTRUCTIVE SURGERY



教授
森 弘樹

1999年に設立された「美しく創造する外科」が特徴の分野ですが、“Form ever follows function”であり、機能にも配慮しています。臨床では先天性・後天性の形体異常・機能障害を扱います。特に、乳癌や四肢などの癌切除後の形態・機能の再建、唇裂・顔面骨骨折を含む顎顔面、眼瞼下垂などの眼形成、切断指・褥瘡・足壊疽などの急性・慢性創傷の治療を得意としています。マイクロサージャリーから骨

切り、レーザー治療まで幅広い治療手技を用い、3D写真&プリンティング、幹細胞付加移植などの新規技術も取り入れています。臨床研究として治療成績の比較や新しい術式開発を行い、基礎研究として脂肪再生、神経再生などのテーマを扱います。2022年に新設された生体組織再建外科学分野とも連携して臨床、研究、教育活動を行っています。

顎顔面頸部機能再建学講座

頭頸部外科学分野

DEPARTMENT OF HEAD AND NECK SURGERY



教授
朝蔭 孝宏

頭頸部領域の特徴は呼吸、食事、発声、会話といった生活に大事な役割を担っていることと、衣服におおい隠されず外観に晒されていることです。ここに腫瘍ができると、腫瘍そのものの影響や治療のために、先に挙げた大事な役割が損なわれ、容貌の変化が目立ってきます。

一方、頭蓋底とは顔と脳の境の領域で、この領域は顔の奥深い場所にあり非常に複雑な構造をしている上に重要な神経や

血管が数多く走行しています。そのため頭蓋底腫瘍を手術により摘出することは非常に難しく重い後遺症を残す危険性があります。

私たち頭頸部外科では、治療効果を高め、かつ後遺症を少なくするために、頭蓋底の臨床解剖とそれに基づいた新しい術式の開発、様々な非侵襲的治療法および手術器具の開発、頭頸部癌の新しい診断法などに関する研究を進めています。

顎顔面頸部機能再建学講座

腫瘍放射線治療学分野

DEPARTMENT OF RADIATION THERAPEUTICS AND ONCOLOGY



教授
吉村 亮一

放射線治療は放射線生物学と放射線物理学を基礎とし、人体の機能と美容を温存したまま、癌の根治から緩和まで対応する医療です。

私たちは臨床においては口腔癌をはじめとした小線源治療と、エックス線を用いた高精度外部照射治療によって、東京医科歯科大学ならではの高度な放射線治

療を提供したいと考えており、また研究においてはその適応拡大とさらなる高度化を目指しています。

教育においては画像診断・核医学分野と連携し、より臨床的で実践的な学生教育を行うとともに、放射線治療を通じて全人的な癌治療に携われる医師を育成することを目指しています。

顎顔面頸部機能再建学講座

生体組織再建外科学分野

DEPARTMENT OF RECONSTRUCTIVE PLASTIC SURGERY

教授
田中 顕太郎

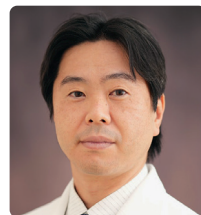
臨床では再建形成外科として診療を行っています。当科はマイクロサージャリーを用いる組織移植手術を日常的に行う高い技術を有しており、頭頸部を中心に、失われた身体組織の機能と形態の再建を目指しています。その技術を生かし、皮膚悪性腫瘍進行例の外科的治療、血管ネットワークを含む組織移植による難治性潰瘍治療、静的および動的再建による顔面神経麻痺治療などにも力を入れてお

り、難易度の高い再建手術を必要とする患者様の治療に積極的に取り組んでいます。これらの診療活動を基に、大学院の分野としては、頭頸部頭蓋底再建術式の開発、神経移植術後の神経再生メカニズムの解明、移植組織の術後形態機能変化の解析と術式への臨床応用、顔面神経麻痺の再建術式および機能評価法の開発、糖尿病性足壊疽症例での患肢温存術式の開発などの研究を進めています。

生体支持組織学講座

運動器外科学分野

DEPARTMENT OF JOINT SURGERY AND SPORTS MEDICINE

教授
古賀 英之

多岐にわたる運動器疾患のうち、主に関節疾患の研究、教育、診療の発展を目的に2000年4月本学の大学院大学化に伴い新設された分野です。スポーツ外傷の代表である膝前十字靭帯損傷や半月板損傷をはじめ、関節疾患の治療に対して解剖から生体力学的検討まで、世界をリードする研究と診療を実施しています。人工関節置換術(股関節・膝関節)、膝周囲骨切り術の手術件数は国立大学法人で

有数の実績であり、成績も良好です。人工股関節全置換術においては、両側一期的手術や下肢延長症例に対する術中モニタリングなどの先進的治療を積極的に取り入れています。

寄付講座の軟骨再生学講座は再生医療の発展や変形性関節症の病態解明と治療の研究を推進しており、当教室と共同して数多くの大学院生と共に研究、教育、診療活動を行っています。

生体支持組織学講座

細胞生物学分野

DEPARTMENT OF CELL BIOLOGY

教授
中田 隆夫

細胞生物学分野は旧医学部解剖学第一講座で、山田平彌教授(1951年3月-1976年3月)、和気健二郎教授(1977年1月-1997年3月)、岡部繁男教授(1999年4月-2007年8月)を経て中田隆夫教授(2008年7月-)が着任し、現在に至っております。

教育については医学部医学科の細胞生物学、組織学(顕微解剖学)を担当します。

研究については生物システムを解明すべく、積極的に細胞機能を操作していきます。植物の光受容機構を動物や人のシグナル分子に応用し、光スイッチを作製、細胞を光で操作します。光を使えば、時間空間特異的に細胞機能を活性化できます。入力を様々に変化させ、その出力からシステムの構造を明らかにします。

環境社会医歯学講座

公衆衛生学分野

DEPARTMENT OF PUBLIC HEALTH

教授
藤原 武男

公衆衛生学分野は、どのような社会環境が人々の疾病罹患を予防し、そして健康をもたらすのかについて、ライフコースにわたる視点で明らかにすることを目的としています。そして、官民と積極的に連携をし、得られたエビデンスを政策やプログラムとして社会実装・社会還元することに取り組んでいます。1956年4月の

公衆衛生学講座開設以来、公衆衛生学教育の開拓とその推進にも取り組んで参りました。2018年4月からはハーバード大学及びジョンズ・ホプキンス大学等と連携し、大学院教育、研究および実践において、国内外で活躍できる人材の育成に力を入れています。

生体支持組織学講座

病態代謝解析学分野

DEPARTMENT OF MEDICAL BIOCHEMISTRY

教授
大石 由美子

本分野では生活習慣病や加齢関連疾患に対する研究を行っており、具体的には「1. 慢性炎症を基盤とした生活習慣病のメカニズム解明」生活習慣病の多くは慢性炎症が関与しており、そのメカニズムを解明し、予防や治療法の開発を目指しています。「2. 細胞代謝とエピジェネティクスによる細胞機能の制御」細胞の代謝やエピジェネティクス(遺伝子の発現調節)を通じて、細胞の機能をどのように制

御できるかを研究しています。これにより、さまざまな病気の新しい治療法を探求しています。「3. 加齢に伴う筋再生不全の分子機序の解明とサルコペニア治療・予防法の開発」加齢により筋肉が減少するサルコペニアの原因を分子レベルで解明し、その治療法や予防法を開発しています。これらの研究を通じて、国民の健康イノベーションに貢献したいと考えています。

環境社会医歯学講座

寄生虫学・熱帯医学分野

DEPARTMENT OF PARASITOLOGY AND TROPICAL MEDICINE

教授
石野 智子

寄生虫は、真核細胞からなる病原体で、世界では未だ保健衛生上の大きな問題を起こしています。その中でもマラリアは年間2億人が感染し、乳幼児を中心に約60万人が亡くなる世界三大感染症のひとつです。研究室では、ゲノム編集技術を駆使して、マラリア原虫感染の分子基盤の解明を目指しています。流行地であるガーナ共和国 野口記念医学研究所と連携し、多様性に富む試料を用いた解析にも取り組

みます。基礎研究の成果を基に、ワクチン等の開発に展開したいと考えています。

医学科、保健衛生学科ともに医動物学の講義・実習を担当しています。食生活の好みから日本に多くみられる寄生虫症や、国際化が進む中で、海外から流入される寄生虫疾患があります。幅広い寄生虫疾患を正確に診断・治療でき、さらには世界で活躍できる医療者の育成を目指しています。

法医学分野

DEPARTMENT OF FORENSIC MEDICINE

教授
鵜沼 香奈

当分野は1952年に初代教授古畑種基によって開設され、1992年から東京の司法解剖を開始、現在、東京、茨城の司法解剖及び調査法解剖を担当しています。

法医学は亡くなった方の死因を究明する学問と誤解されがちですが、実際には生きている人々が暮らす社会全体の安全や権利を守るための学問です。

当分野では生体・死体にかかわらず、その原因や成傷機序などについて医学的見

地から意見を述べる「実務」、実務に直結させた「研究」、学生などへの「教育」を3本柱として、他分野と連携し、バランスのとれた業務を目指しています。

今後も、若手法医学者の育成と共に、多種多様な専門家との連携を維持・発展させながら、正確な診断や医学に応用できる基礎的研究を進め、本学らしく日本の法医学を牽引できるように皆で努めていきたいと考えています。

先進倫理医科学分野

DEPARTMENT OF LIFE SCIENCES AND BIOETHICS

教授
吉田 雅幸

当分野では研究倫理支援と遺伝子診療科を主軸として活動を行っています。

研究倫理に関しては、学部学生・大学院生からの倫理教育に加え、全学の医療者・研究者を対象とした研究倫理講習会を実施しています。倫理審査支援として、研究者への申請支援と審査委員会の運営支援を通じて、本学における先進的研究発展に貢献しています。

また、医学系大学倫理委員会連絡会議

の事務局として、全国的な研究倫理支援体制の中心的役割を担っております。

臨床としての遺伝子診療業務では、臨床遺伝専門医・認定遺伝カウンセラーを中心に、臨床各科と連携したチーム医療を実施しています。最新の遺伝子検査の実施に加え、検査に至る経緯などについて月例カンファレンスで共有しており、また遺伝子解析研究、動脈硬化症についても独自の研究を展開しています。

政策科学分野

DEPARTMENT OF HEALTH POLICY

教授
岡田 就将

当分野では、保健医療サービスの効果的提供をもたらす政策を明らかにし、その実現・普及のため研究及び教育に取り組んでいます。政策が多様な学術領域の上に成り立つとともに、これらサービスも高度に複雑化していることを踏まえ、実践を通じた知見の獲得およびその知見に基礎を置いた政策実現のプロセス構築に活動の主眼を置いています。現在の主なテーマは、医療におけるICT技術の普及、

持続可能性と産業化を両立させる医療機器評価制度、在宅医療、終末期医療、医療の国際展開等です。前述の議論の場の中心は、本学大学院修士課程に設置されている医療管理政策学コース（MMAコース）であり、医療政策の中心を担う省庁関係者、病院関係者、企業関係者らが集い、立場を越えた意見交換を行いながら、合意点を見出し社会への実装に向けた取り組みにつなげています。

保険医療管理学分野

DEPARTMENT OF INSURED MEDICAL CARE MANAGEMENT

教授
藍 真澄

保険医療管理学分野は、2013年10月に大学院医歯学総合研究科博士課程医歯学系専攻に設置されました。社会保険医療はわが国の医療の大部分を占め、法令や制度に関する医師をはじめとした医療者の理解が運用上重要ですが、現実には特に若手医師を中心に十分な理解が得られていないという背景があります。当分野では、病院保険医療管理部という医療

の現場で社会保険医療システムの教育、啓発において重要である方法論、資材の開発、人材の育成を行ってきました。また、学内のみならず、本学の関連病院でも保険講習会をはじめ必要な支援をさせていただいています。社会保険医療のあり方に関する研究とともに医療データを用いた研究を行うことで、今後の医療に資することを目的に活動を続けています。

医療政策情報学分野

DEPARTMENT OF HEALTH POLICY AND INFORMATICS

教授
伏見 清秀

医療政策情報学分野は、急速に発達する情報技術を活用して医療ビッグデータの分析手法を開発し、それに基づく医療制度設計、医療評価手法の開発、医療政策提言などの研究を進めています。

政府各部門と連携して、DPCデータ、レセプトデータ、電子カルテデータ、医療経営データなどの分析、医療の質の評価、地域医療提供体制の評価など、我が国の医療のさらなる発展に寄与する研究を実

施しています。また、2014年度からは、文部科学省高度医療人材養成事業「PDCA医療クオリティマネージャー養成」プログラムも実施しております。

学内各教室および厚生労働省、国立病院機構、他研究施設等と協同して、実地臨床あるいは医療関連の職業に従事して問題意識を持った方をはじめ、学部、修士課程卒直後の方など様々な学生を受け入れて、教育、研究を進めております。

国際保健医療事業開発学分野

DEPARTMENT OF GLOBAL HEALTH ENTREPRENEURSHIP

教授
中村 桂子

国際保健医療事業開発学（Global Health Entrepreneurship）分野は、2000年4月に発足した旧 国際保健医療協力学（International Health and Medicine）分野を継承して2016年4月に設置されました。保健医療や地球環境と健康の課題に実装科学研究の手法で取組み、政策展開を支える研究を行っています。

国際機関、国内外の行政組織、アジア・太平洋、中東、アフリカ、欧州等の大学等

との国際共同研究を通じ、保健医療事業の研究開発を行うとともに、国際的指導力を発揮できる専門家の育成を行っています。

1997年7月に世界保健機関（WHO）より指定されたWHO健康都市・都市政策研究協力センターを継承して、2016年から中村桂子がセンター長をつとめています。

環境社会医歯学講座

臨床統計学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL BIostatISTICS

教授
平川 晃弘

臨床統計学分野は2020年に設置され、生物統計学的手法の研究開発、先進的試験デザイン・統計解析法を利用した臨床研究の推進、医療・健康分野におけるクリニカルデータサイエンスの実践に取り組んでいます。研究室には、生物統計家を目指す修士課程の大学院生や、医師、製薬企業の開発担当者、生物統計家等の博士課程の大学院生が在籍しています。当分野では、様々な専門分野の研究者・大

学院生が集まり、臨床試験のデザインと統計解析を理論と実践の観点から学んでいます。特に、アダプティブデザインやベイズ流アプローチといった最新の臨床試験方法論の研究に力を入れています。臨床統計学分野で学ぶことで、臨床試験の計画、実施、解析のための高度な専門知識と実践的な技術を身につけることができ、医療の発展に貢献することができると期待されます。

老化制御学講座

リハビリテーション医学分野

DEPARTMENT OF REHABILITATION MEDICINE

准教授
酒井 朋子

当分野では全人的な機能回復を目指し、リハビリテーション医学のエビデンス集積に尽力しており、すべての診療領域に広くリハビリテーション治療を提供しています。専門性の高い外科手術や重篤な疾患に対し、入院早期や手術直後からの積極的なリハビリテーションを行い、不活動の弊害を避け患者の機能回復を最適化するサポートを行い、集中治療室では入室直後からの早期離床の推進、人工呼

吸器管理下の歩行訓練を行います。また、嚥下の評価と治療により誤嚥性肺炎を予防し、安全な摂食手段を検討します。狭心症、心筋梗塞、心不全の患者には、入院早期から心臓リハビリテーションを行い、心肺運動負荷試験に基づく運動負荷処方により、退院後の身体活動を支援します。がんのリハビリテーションでは、手術・放射線・化学療法中の機能低下の予防や回復を目指しています。

環境社会医歯学講座

感染症健康危機管理学分野

DEPARTMENT OF INFECTIOUS DISEASE EMERGENCY PREPAREDNESS

教授
矢沢 知子

感染症健康危機管理学分野は、2022年に発足した新しい分野です。本分野の重要なミッションは、感染症危機による国民の生命・財産への被害を最小化することであると考えています。そのため、感染症インテリジェンス機能の強化、パンデミックを想定した危機管理体制の確立及び感染症危機管理対応の体系化を進めています。また、感染症危機が生じた際、

様々な場面でリーダーシップとコミュニケーション能力を発揮して、機動的に危機対応の活動ができる人材を育てていくことを、もう一つの重要なミッションであると考えています。感染症の知識を深め、豊かな感性や着想を育みながら未知なる脅威へ挑む。そうした次世代の人材を社会へ輩出し、感染症に強い社会の実現に貢献してまいりたいと願っております。

全人的医療開発学講座

臨床検査医学分野

DEPARTMENT OF LABORATORY MEDICINE

教授
東田 修二

1962年に医学部附属病院に検査部が発足し、1977年に専任の教授・部長を置くことが決まり椎名晋一助教授が就任しました。1983年に医学部臨床検査医学講座が開講し椎名教授が初代教授に就任しました。1994年に第2代の奈良信雄教授が就任し、1999年には大学院重点化により臨床検査医学分野になりました。2015年に第3代の東田修二が就任し、現在に至ります。教育は医学科と保健衛生学科

の臨床検査に関する講義と実習を担当しています。研究は白血病とリンパ腫の細胞分子生物学的な増殖機序の解明とそれに基づく新規分子標的薬の探索および薬剤感受性検査法の開発を行っています。臨床では病院検査部で68名の検査技師と検体・生理学的検査を行い、コロナ禍の時は他院に先駆けてPCR検査を開始し、変異株解析での新知見を世界に発信しました。

環境社会医歯学講座

医療安全管理学分野

DEPARTMENT OF HEALTHCARE QUALITY AND SAFETY (HQS)

教授
工藤 篤

医療安全管理学分野は2024年6月に新設されました。2000年以降、医療事故を軽減する取り組みが国家的に為されてきました。現在特定機能病院は、相互チェックとピアレビュー、インシデントの報告、医薬品の使用体制の構築、高難度新規医療技術の審査、医療安全管理委員会と監査委員会の設置、医療事故調査制度への対応が求められています。このた

め、円滑な医療行為が可能な組織づくり、患者の安全を担保しつつ、医療の質を分析し、必要な対策を立てて、病院経営、係争対応、職員の安全を図ることが重要です。当分野は学内各教室、部門、他施設、他大学、法曹などから広く人材を集め、より良い医療のための研究を行ってまいります。

全人的医療開発学講座

生体集中管理学分野

DEPARTMENT OF INTENSIVE CARE MEDICINE

教授
若林 健二

集中治療医学は、大手術後、敗血症や多臓器不全の管理など、生命の危機に瀕した重症患者を対象とします。1998年に今井孝祐教授が着任し、6床のICU運営を開始以降は三高千恵子先生・中澤弘一先生の指揮下に基盤を確立しました。2016年に重光秀信教授が着任後、朝回診を主軸に据えた多職種連携を推進し、重症化予防を目指したRASの取り組みも含め、基盤診療部門として日々活発に取

り組んでいます。パンデミックを機に集中治療の重要性が再認識され、独立した専門領域として大きく発展する中で2021年より若林が部門を率いております。過去10年で医学生への講義や臨床実習も始まり、現在では質の高い橋渡し研究や臨床研究、ビッグデータ解析など多領域において産学共同研究も積極的に行い、世界へ発信する集中治療医学講座を目指して成長を続けています。

全人的医療開発学講座

臨床医学教育開発学分野

DEPARTMENT OF MEDICAL EDUCATION RESEARCH AND DEVELOPMENT

教授
山脇 正永

本講座は、2000年発足の医学部附属病院総合診療部を起源とし、2006年度より臨床教育の研究開発を行う基幹講座として改変され、統合教育機構とも密接な連携をとり活動しています。「調整と支援を通じて高度先進医療の推進、高度な医学教育に貢献する」の理念のもと、卒前医学教育の横断的教育課程の充実、卒後臨床研究プログラムの運営、医学教育に係る研究・開発、医学教育に係る管理運

営等に取り組み、科目横断的な、卒前・卒後のシームレスな学修プログラム開発、臨床能力評価のための新たな workplace-based assessment (WPA)の開発、VR/MRを用いた新規学修教材の開発、新たな臨床能力評価試験方法の開発、卒前から卒後にわたる臨床能力開発のための ePortfolioの開発、指導医講習会の企画運営など指導医のサポートを実施し活動しています。

全人的医療開発学講座

総合診療医学分野

DEPARTMENT OF GENERAL MEDICINE

教授
橋本 正良

2018年度より開始された日本専門医機構認定「新専門医制度」において、「総合診療」が第19番目の基本領域として新設されました。これに伴い本学では、当時の老年病内科から引継ぎ総合診療科が設立されました。総合診療医は general という名の specialist です。特定の臓器に限定されない多岐に渡る疾患や症状に対し、全人的アプローチを実践し、各専門診療科や多職種、地域医療機関との連

携を重視した包括的な医療を提供します。また、次世代の医療従事者を育成する教育拠点として、難病や複合疾患から common disease まで幅広い臨床能力、知識、技術を備えた医師、医学生を育成します。さらに、高齢者の健康増進や地域医療の発展、医学教育に至るまで、未来の医療に寄与する研究に取り組み、社会全体の健康と福祉に貢献しています。

全人的医療開発学講座

救急災害医学分野

DEPARTMENT OF ACUTE CRITICAL CARE AND DISASTER MEDICINE

教授
森下 幸治

救急災害医学分野では、2006年4月に開設されたERセンターでの臨床を中心に、教育・研究に力を入れています。現在、救急車の受け入れ台数は全国国立大学中トップクラスとなっており、各科と連携してベストな救急医療を提供しています。特に重症外傷に対する集学的治療、重症敗血症に対する集中治療、ドクターカーを駆使した病院前医療に力を入れています。

す。研究分野は、各種侵襲による生体反応とその制御の解明、治療法の開発といった集中治療学的視野から、外傷に関する臨床的・基礎的研究、さらに外傷疫学・外傷予防、災害医療といった社会医学的要素までを網羅しております。将来、Physician-scientistとして救急災害医学分野において活躍できる、最先端かつ実践的な研究を目標としています。

全人的医療開発学講座

統合臨床感染症学分野

DEPARTMENT OF INFECTIOUS DISEASES

教授
具 芳明

統合臨床感染症学分野は2021年に新たに設置されました。大学病院では感染症内科と感染制御部を担当し、感染症の観点からトータル・ヘルスケアを提供することで感染症の治療成績や医療安全の向上に尽力しています。臨床に根ざした研究活動に取り組んでおり、国内外で大きな課題となっている薬剤耐性(AMR)対策に関連した臨床研究や疫学研究を中心に精力的に進めています。また、将来発

生しうるパンデミックを念頭に置いたサーベイランスの確立やアウトブレイク対応のレベル向上も重要な課題です。これらを通じTMDU感染症センター(TCIDEA)の中心的な役割を果たし、感染症の専門家育成はもちろんのこと、感染対策を広く底上げすることによって将来の感染症危機に備えるための基盤づくりを進めています。

全人的医療開発学講座

臨床腫瘍学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL ONCOLOGY

教授
浜本 康夫

臨床腫瘍学分野は2012年5月に三宅智先生が開設され2024年4月から浜本康夫が主任教授に着任いたしました。この分野は「腫瘍内科学(臨床腫瘍科)」、「がんゲノム治療学(がんゲノム診療科)」、「緩和医療学(緩和ケア科)」の三つの担当診療科で構成され研究、教育、診療に携わっております。近年、がん診療は目覚ましい進歩を遂げており薬物療法、緩和医療、がんゲノム医療は極めて高度な専門的な知識と経験

が必要です。臨床腫瘍学分野は、横断的に深くがん診療に関わるため、がん診療・教育・研究の重要な役割を担っております。そのため様々な院内の診療科、他施設や学内外の研究分野と関係を深め連携し、優秀で人間味のあふれた専門医・研究者・教育者・医療人を育成し、東京医科歯科大学、東京科学大学の発展に寄与できるように努力してまいります。

認知行動医学講座

神経機能形態学分野

DEPARTMENT OF NEUROANATOMY AND CELLULAR NEUROBIOLOGY

教授
寺田 純雄

当分野は、1966年に萬年甫教授によって開設された解剖学第三講座に由来し、中村泰尚教授を引き継ぐ形で2005年9月に発足しました。解剖学的な観点から、新しい分子や現象をみつける、観察法を開発する、という姿勢で研究を進めています。これまで細胞骨格動態調節機構の解明を主なテーマとしてきましたが、研究対象に関わらず、本質的なブレイクスルーに独

自の観測技術の開発は欠かせません。私たちは、理工学分野の研究者との永年にわたる緊密な連携をもとに、蛍光偏光を利用した「ポラリス法」の他、数々の可視化、測光要素技術の新規開発に成功しています。モデル動物受精卵の発生過程をはじめ、様々な局面で、新たな生命現象の発見につながっています。形態・機能変化を追う“顕微鏡”開発により、新たな分子細胞生物学を拓くことを目指しています。

眼科学分野

DEPARTMENT OF OPHTHALMOLOGY AND VISUAL SCIENCE

教授
大野 京子

眼は外部からの情報の80%を取り入れている重要な感覚器です。当科では、大切な眼と視覚を侵す様々な病気の診断と治療を行っています。

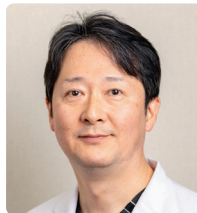
患者様中心の質の高い安全な医療の提供をモットーとし、診療は、充実した診療スタッフとともに優秀な眼科専門医により行われ、大学病院の特徴を生かして他科との協力体制を密接にとりながら、最新の診療機器と技術を用いて行っています。

屈折異常(近視、遠視、乱視など)や結膜炎などのcommon diseaseから、白内障、緑内障、角膜炎、斜視弱視、ぶどう膜炎、網膜剥離、病的近視、糖尿病網膜症、黄斑疾患、神経眼科的疾患など、失明につながるすべての眼科疾患を対象にしています。

研究面では、病的近視、黄斑疾患、ぶどう膜炎、神経眼科を中心に、多くの知見を世界に向けて発信しています。

耳鼻咽喉科学分野

DEPARTMENT OF OTORHINOLARYNGOLOGY

教授
堤 剛

耳鼻咽喉科は聴覚・平衡覚・嗅覚・味覚と多岐にわたる感覚器を対象とし、新生児から高齢者まで広範な年齢層のQOLに直結する診療を行います。当科ではめまい、難聴を含む耳科疾患を中心に、鼻副鼻腔、口腔・咽頭・喉頭疾患まで幅広い領域を対象として教育・研究・診療を行っています。診療においては特に中耳疾患や外耳道癌、人工聴覚器、めまいの内科的/外科的治療、鼻副鼻腔手術などを多く手

掛けています。研究ではめまい・難聴に関する基礎/臨床研究が多数併行して走っており、めまいの医療機器開発も行っています。さらにVRを利用した手術支援・教育ツールの開発や、AIの臨床導入に関する研究も進めています。教育は学部学生から大学院生、研修医まで、リサーチマインドを持った優れた臨床医を育てるべく努力しています。

脳神経病態学分野

DEPARTMENT OF NEUROLOGY AND NEUROLOGICAL SCIENCE

教授
横田 隆徳

脳神経内科は治療法のない稀な慢性疾患を診る科、とよく誤解されていますが、実際は意識障害、けいれん、脳卒中、髄膜炎・脳炎などの急性疾患から、アルツハイマー病などの多くの認知症のように慢性疾患まで広汎な疾患を対象としています。

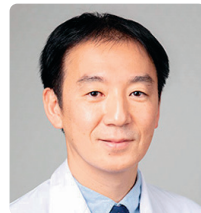
また、頭痛、てんかん、神経感染症、神経免疫疾患など、よく治るコモンな疾患が多く、難治性の神経変性疾患も研究や治療法の開発が進展しつつあります。神

経疾患は種類も数も非常に多く、今後もしその克服を目指して弛むことなく発展を続けます。特に核酸医薬については2022年に核酸・ペプチド創薬治療研究センター(TIDEセンター)を開設し日本の中核として臨床応用を目指して研究を推進しています。

また一般市民に向けた、医師会、学会、大学等における積極的な啓発活動にも力を入れています。

精神行動医科学分野

DEPARTMENT OF PSYCHIATRY AND BEHAVIORAL SCIENCES

教授
高橋 英彦

精神医学の研究、教育、診療を担当する当分野は、1944(昭和19)年5月に初代教授島崎敏樹が東京医学歯学専門学校時代の本学に精神病学教室を開設した時に始まります。その後、神経精神医学教室となっており、島田安雄教授、高橋良教授および融道男教授が主宰しました。1999年4月に本学の大学院重点化に伴い精神行動医科学分野と改称し、西川徹教授を経て、2019年2月に高橋英彦教授が着任

し、現在に至っています。診療部門である精神科では、統合失調症、気分障害、不安障害などをはじめとする様々な精神疾患に対し、エビデンスに基づく最新の知見を取り入れた治療を行っています。研究については、分子生物学的・薬理学的研究、遺伝子解析、画像解析から、新規薬物療法開発を目指したトランスレーショナル研究・臨床研究まで幅広く進めています。

脳神経機能外科学分野

DEPARTMENT OF NEUROSURGERY

教授
前原 健寿

脳神経機能外科学分野の対象となる疾患は、脳脊髄腫瘍、血管障害、外傷、奇形、機能異常、感染など多岐にわたります。

その各々について、固有の臨床的・基礎的研究課題が存在しています。中枢神経系を研究対象として研究する際には、脳脊髄の正常解剖・正常機能に関する知識、疾患の病態に関する深い理解と洞察力が

要求されます。

一方で研究を通じて養成されたマインドを持って臨床活動に従事することが、治療成績向上につながると考えます。また、研究の深まりはさらなる脳研究への探求心を満足させてくれるに違いありません。「脳を知りたい」、知的好奇心旺盛で活発な若い方々の参入をお待ちしています。

血管内治療学分野

DEPARTMENT OF ENDOVASCULAR SURGERY

教授
壽美田 一貴

当分野は2010年に日本でも数少ない脳脊髄の血管障害に対する治療を専門とした教室として開設されました。1992年に日本で脳血管内治療が保険承認されるようになってからは、治療技術の向上、ステントなどの治療器具の発展に伴い、安全で効果的な治療を行えるようになりました。デバイスの開発などにおいては、海外では医工連携が行われ、今後は本邦からの最新の治療器材の開発など東京科学大学

としても期待できる分野と考えています。

研究面においては、専門性の高い臨床技術を伝承していくために3Dプリンターなどを用いたトレーニングモデルを確立させることに加え、脳・脊髄血管障害に対する病態解明や、より安全で効果的なカテーテル治療を行うためにAIを用いた治療支援機材の開発を行うなど、臨床研究以外にも幅広い分野での研究活動を行っています。

免疫学分野

DEPARTMENT OF IMMUNOLOGY

教授
佐藤 荘

私たちの体は外からは細菌やウイルスなど病原体の侵入、内からはがん細胞の出現と、絶えず自己の存続を脅かすような危険にさらされていますが、免疫システムが備わっているおかげで、これらの攻撃から守られています。一方で、そのシステムが誤作動することにより、過剰な炎症応答や自分自身を攻撃してしまうこともあります。大学院医歯学総合研究科 免疫学分野では、様々な疾患の克服や

制圧をめざして免疫システムの役割の解明やその制御方法に関する研究をおこなっています。特にその中でも、免疫細胞の多様性の観点から疾患発症メカニズムを繙き、その成果を様々な疾患の克服にむけたトランスレーショナルリサーチにつなげていこうと日々研究を進めており、そのため、基礎系—臨床系—研究所と協同して学内連携を大きく展開しています。

ウイルス制御学分野

DEPARTMENT OF MOLECULAR VIROLOGY

教授
白銀 勇太

COVID-19のパンデミックは、人類社会に大きな影響を与えました。その結果、ウイルス感染症に対して、これまで以上に大きな注目が集まっています。本分野は、医学部教育において微生物学を担当し、寄生虫以外の感染性病原体についての講義・実習を行うことで、これからの医療を担う人材が必ず身につけておかねばならない感染症の基礎知識を教えています。

また、研究においては、ヒトに深刻な疾患をもたらすウイルスの病原性発揮メカニズムの解明を進めています。特に、エンベロープウイルスの融合遺伝子に着目し、病原性を決める変異やその分子メカニズムの研究に精力的に取り組んでいます。そこから得られた研究成果を基に、抗ウイルス薬やワクチンの開発に取り組み、ウイルス感染症の制御に応用していきたいと考えています。

ハイリスク感染症研究マネジメント学分野

DEPARTMENT OF HIGH-RISK INFECTIOUS DISEASE CONTROL

教授
武内 寛明

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応については、WHOによる緊急事態宣言の終了および本邦においては5類感染症への移行に伴い大きな節目を迎えましたが、様々な要因により発生が予想される新興・再興感染症による次なるパンデミックの影が忍び寄りつつあることを認識しなければなりません。本分野は、今後のパンデミックに備えるべきハイリスク感染症基礎学術研究展

開を行うため、2023年6月に新設された分野です。今後も発生が予想される新興・再興感染症や国際感染症を想定し、(1)BSL3施設を用いた高病原性病原体に特化した基礎学術研究、(2)BSL3施設を最大限活用した学内外における感染症研究のマネジメント、および(3)レベル3相当の病原体等の取扱いに精通し研究する人材の育成、の3項目を推進しています。

発生発達病態学分野

DEPARTMENT OF PEDIATRICS AND DEVELOPMENTAL BIOLOGY

准教授
鹿島田 健一

発生発達病態学分野(小児科)は、開設後80年を迎え、所属した同窓生は全体で550人以上を数えます。我々のミッションは「最高レベルの小児専門医療」を提供することです。血液・腫瘍、免疫(感染症)、循環器、神経、腎・膠原病、内分泌・代謝、先天異常、アレルギーなど多種の専門グループが、それぞれの専門性を深め、連携し、小児期のあらゆる難治疾患と向き合い、疾患の治療のみならずウェルビーイ

ング(身体のみならず、精神的、社会的に満たされた状態)を目指し、総合的な医療を提供します。

研究では、医学の進歩に寄与すべく、新たな治療法や、病態の解明を通じた難病克服法の開発を、教育では明日の小児医療を様々な形で支える医師の多様なキャリアを支え、育成することを目指し、教室一丸となり取り組んでいます。

膠原病・リウマチ内科学分野

DEPARTMENT OF RHEUMATOLOGY

教授
保田 晋助

当科は第一内科が臓器別になった1999年に発足しました。その後四半世紀にわたって、関節リウマチ、全身性エリテマトーデスに代表される膠原病を中心に、近年では自己炎症症候群や先天性免疫不全症、他科との境界領域にある症例、小児発症患者さんの移行期からの受け入れなど幅広く免疫難病の診療を行ってきました。現在も、難治例や診断困難例を含め多くの症例を紹介いただいています。

リウマチ膠原病治療は分子標的薬が主役となりつつあり、新規薬剤の開発も進んでいます。一方で、多彩な症状を有する患者さんに問診・診察を行いつつ情報収集してゆくという診療スタイルは以前と変わらないものです。膠原病では長期にわたる治療継続が避けられません。患者さんの学業・就職・結婚・子育て・お孫さんの世話などライフイベントを見据えた診療を行っています。

皮膚科学分野

DEPARTMENT OF DERMATOLOGY

教授
沖山 奈緒子

皮膚科臨床は、口腔粘膜や毛髪・爪を含む「皮膚」に表現される微細な変化から全身の生体状態を把握し、疾病の早期診断と的確な治療を行います。アレルギー疾患、感染症、膠原病、血管炎・末梢循環障害、水疱症、皮膚悪性腫瘍、角化症、色素異常症、発汗異常症、脱毛症など幅広い分野の疾患を診療しています。1944年5月に皮膚泌尿器科学教室として開設され原田儀一郎先生が初代教授、1966

年に色素研究者の清寺真先生が第2代教授、1973年真菌研究者の香川三郎先生が第3代教授、1990年皮膚免疫学でご業績のある西岡清先生、2005年アレルギー学や発汗異常で高名な第5代横関博雄先生と受け継がれ、2022年1月に皮膚免疫アレルギー学を専門とする沖山奈緒子が第6代教授に就任、信頼のおける思考力のある皮膚科医の育成に取り組んでいます。

器官システム制御学講座

人体病理学分野

DEPARTMENT OF HUMAN PATHOLOGY

教授
大橋 健一

病理学には、形態学を基盤にして最新の手法を用いながら病気の病因・病態を明らかにしていく基礎医学の側面と、患者様から採取された組織・細胞検体を用いて形態学的手法によって確定診断を行う臨床医学の側面があります。後者は診断病理学と呼ばれ、病理部・病理診断科として病院における重要な部門です。人体病理学分野にとって両側面がバランスよく発展することが重要であり、リサーチ

マインドをもった診断病理医の育成、臨床・病理診断に基づき着想され、臨床、病理診断に結果が還元できる研究を進めていく研究医の育成に努めています。人体病理学分野では、これまで消化管癌における進行メカニズムの分子病理学的解析、特に早期の食道扁平上皮癌における浸潤に関する分子機構、脂質過酸化と新規細胞死に関する研究等について研究をおこなっています。

器官システム制御学講座

消化器病態学分野

DEPARTMENT OF GASTROENTEROLOGY AND HEPATOLOGY

教授
岡本 隆一

消化器病態学分野は平成12年（2000年）に発足し、本年度で25年目を迎えました。この間、高いレベルで特色ある診療を実践し、これを基礎・臨床研究に活かす「クリニカルサイエンス」の伝統を育て、継承しています。また関連病院との信頼関係の下で多施設共同研究等に積極的に取り組んでいることも、当分野の特長の一つです。研究においては「免疫調節と再生

医療による炎症性腸疾患の治療法開発」、「肝発癌抑止を目指した肝疾患病態メカニズムの解明」、「消化器内視鏡による新規診断法及び治療法の開発」を主要なテーマとし、新しいサイエンスを創り、これを価値ある医療へつなげ、世界中で繰り返し使われるオリジナルの技術や知見を一つでも多く社会に送り出すことを教室全体で追求しています。

器官システム制御学講座

細胞生理学分野

DEPARTMENT OF PHYSIOLOGY AND CELL BIOLOGY

教授
磯村 宜和

細胞生理学分野では、げっ歯類の行動発現を担う脳回路の基本原理解明することを大きな研究目標として掲げています。特定の行動課題を遂行するマウスやラットの大脳皮質、海馬、大脳基底核、視床などの神経回路を対象として、多点電極をもちいたマルチニューロン記録技術を中心に、遺伝子改変動物やアデノ随伴ウイルス（AAV）ベクターを活用したオプトジェネティクス（光遺伝学）技術、トラ

ンスクリプトーム解析、理論的解析を組み合わせて、神経生理学的研究を推進しています。また当分野は、医学部生の生理学と神経科学の授業と実習を担当し、研究実践プログラムとプロジェクトセメスターの履修生に本格的な研究指導をしています。生理学は技術や考え方の習得に時間がかかる学問ですが、若手の研究者の自由な発想を大切に研究室の雰囲気作りを心がけています。

器官システム制御学講座

総合外科学分野

DEPARTMENT OF SPECIALIZED SURGERIES

准教授
岡本 健太郎

総合外科学分野は、2015年1月の発足時以降、診療科改変を経て、2024年度現在では、乳腺外科と小児外科の2診療科で構成されています。それぞれに専門的な2つの診療科は、互いに連携しながら「オーダーメイド治療の確立」に向けて臨床と研究を継続してきました。最近では、臨床研究や企業などとの共同研究にも力を入れております。また、外科医不足と呼ばれる近年においてもコンスタントに

若手が増えているように教育も充実しています。さらに、総合外科学分野は消化器・一般外科部門の1分野であり、消化管外科学分野、肝胆膵外科学分野と一体となり、強い連携の下に部門および関連病院全体の発展を目指しています。総合外科学分野は、新しく誕生する東京科学大学、そして社会に貢献できる分野になるように、みんなで力を合わせて努力していきます。

器官システム制御学講座

統合呼吸器病学分野

DEPARTMENT OF RESPIRATORY MEDICINE

教授
宮崎 泰成

我々は、診療においては呼吸器疾患全般について全人的包括的医療を科学的視点をもって行うことを指針とし、間質性肺炎やサルコイドーシスなどのびまん性肺疾患、気管支喘息、COVID19を含む肺感染症、肺癌、慢性閉塞性肺疾患（COPD）など多くの疾患の診療を行い、社会に貢献しながら各疾患の病態解明を目指しています。過敏性肺炎の疫学調査と疾患進行抑制のためのエクスポソーム研究、モ

デルマウスを用いた病態解明、喘息やCOPDの動物モデルを用いた病態解析、肺癌のトランスレーショナルリサーチ、深層学習を用いた肺癌やサルコイドーシスの診断、COVID19の病態解明など広範な研究を行い、多くの成果を上げています。当分野では、これからも豊富な臨床経験と臨床情報を基に、新たな知見を世界に先駆けて発信していきたいと考えています。

器官システム制御学講座

循環制御内科学分野

DEPARTMENT OF CARDIOVASCULAR MEDICINE

教授
笹野 哲郎

循環制御内科学分野（循環器内科）は、それまでの第一内科、第二内科、第三内科の循環器グループが再編され、2001年に誕生しました。発足時の医局員数は約200名でしたが、現在は約400名の医局員が所属しております。研究面では、不整脈・虚血性心疾患・心不全・画像診断・血管炎等の稀少疾患、を対象として、基礎研究・臨床研究・医工連携研究を展開しており、近年はAIを応用した心電図

解析や、自治体や企業との連携による心疾患の早期発見・遠隔診療研究を行っています。また、臨床面では、ハイボリュームセンターを含む20以上の関連病院との連携によって循環器診療に貢献しており、大学及び関連病院の各施設の特色を生かした臨床研究と、多施設でのレジストリ研究や前向き研究による臨床エビデンス創出に務めるほか、同時に若手医師の教育と医学生の教育を行っています。

心肺統御麻酔学分野

DEPARTMENT OF ANESTHESIOLOGY

教授
内田 篤治郎

当分野は、麻酔蘇生ペインクリニック科として主に周術期管理、疼痛管理を軸に、関連する集中治療分野などと連携を図り、全身管理における質の向上を目指し、研究を行っています。分野としては、止血機能に関連した周術期の血液凝固モニタリング、周術期の非接触型呼吸モニターの開発、急性肺傷害のバイオマーカー探索に取り組み、喫煙が手術患者の予後に与える影響に関する分析、吸入麻

酔薬が脳組織における遺伝子発現をいかに制御しているかという研究も行ってきました。今後、Post (Peri) Anesthesia Care Unit (PACU)、術後疼痛管理チームのように、多職種介入により周術期管理の質的な向上を目指し、周術期に蓄積される膨大なデータの解析も取り入れ、効果的かつ効率的な治療的介入のあり方を提案し、新規のモニタリングデバイスの開発も実現していきたいと考えています。

生殖機能協関学分野

DEPARTMENT OF COMPREHENSIVE REPRODUCTIVE MEDICINE

教授
宮坂 尚幸

当分野は4つの領域から成り立ち、女性の生涯における生理と病理を探求し、高度な医療を実践することを目的として活動しています。生殖内分泌では女性の内分泌異常に対する基礎研究を行い、併設するリプロダクションセンターでは難治性不妊に対し高度な生殖補助医療を実施しています。 周産期は地域母子周産期センターに指定されており、子宮内環境と児の長期的な予後との関連性や、慢性

疾患を合併した女性の周産期管理を研究しています。婦人科腫瘍では、根治性が高くかつ低侵襲な手術を実施し、悪性腫瘍については化学療法、放射線療法、がんゲノム医学に基づいた個別化医療も行っています。女性医学では、包括的健康栄養教育プログラムを実施し、薬物療法、栄養・運動療法からアプローチした中高年女性の健康維持に関する基礎的・臨床的研究を行っています。

心臓血管外科学分野

DEPARTMENT OF CARDIOVASCULAR SURGERY

教授
藤田 知之

心臓血管外科では、虚血性心疾患・弁膜症・大動脈疾患・重症心不全・不整脈など成人の循環器疾患と、新生児から成人期までの先天性心疾患を対象とした外科治療を行っています。そして、2023年からは末梢血管外科と統合し、末梢血管を含むあらゆる循環器疾患に対しての治療が可能となりました。近年ではロボット心臓手術やステント治療、外科治療とカ

テーテル治療の融合したハイブリッド手術も盛んです。循環器内科との連携においてはさらにTAVIやマイトラクリップなどの治療も行っており、「有効でかつ患者さんに優しい治療」を心がけています。研究面ではECMOや人工心臓、心移植の保存装置などの医工連携による新規デバイスの開発を中心に「未来の医療」に貢献する研究を行っています。

腎泌尿器外科学分野

DEPARTMENT OF UROLOGY

教授
藤井 靖久

泌尿器科では、尿路・副腎・男性性器の腫瘍、前立腺肥大症などの排尿障害、副腎腫瘍などの内分泌学、尿路結石、腎機能異常、泌尿器放射線学、神経泌尿器科、男性科、女性泌尿器科、尿路感染、尿路外傷など広い領域を扱っています。東京医科歯科大学泌尿器科では、「目の前の患者さんと社会に直接役立つ、実践的な新医療を開発すること」を目標にしており、

ロボット支援手術を含めた世界の標準的医療を提供するとともに、泌尿器癌に対する癌の根治と臓器機能の温存を両立させる臓器温存治療を開発しています。具体的には、筋層浸潤性膀胱癌に対しては、化学放射線療法と膀胱部分切除を組み合わせた4者併用膀胱温存療法、前立腺癌に対しては小線源部分治療を開発実践しています。

腎臓内科学分野

DEPARTMENT OF NEPHROLOGY

教授
内田 信一

本学の腎臓内科は日本で最初に透析療法を始めた機関の一つで、腎臓病全般の十分な臨床経験を有します。歴史の長さだけでなく先進的な医療技術にも注力しており、腎臓希少難病への対応や、各種腎臓病の網羅的遺伝子診断システムの開発・運用も行っています。 学術研究にも非常に力を入れており、腎臓関連の水電解質輸送の病態生理について世界レベルでの科学的貢献を重ねてき

ました。最近では腎臓病に影響する生活習慣病や遺伝性腎疾患も扱い、幅広く研究しています。 次世代医師の育成にも尽力し、日本や世界で指導的立場を務める医師・研究者も多数輩出しています。関連病院も約20を数え、腎臓内科学における日本を代表する集団の一つとなっています。 我々の着実な臨床技術や質の高い研究による知見が、多くの場面で患者さんへ還元されることを期待しています。

消化管外科学分野

DEPARTMENT OF GASTROINTESTINAL SURGERY

教授
絹笠 祐介

消化管外科学分野の歴史は、1943年に初代川島健吉教授が外科学第一講座を創設したことに始まります。1954年には外科学第二講座が設立され、両講座は競い合いながら発展を遂げて参りました。その後の再編を経て、2015年4月に消化管外科学分野が誕生し、食道外科、胃外科、大腸・肛門外科の3診療科からなる組織になりました。時代に応じながら外科

学が進化を遂げていく中で、手術アプローチも開胸・開腹手術から胸腔鏡・腹腔鏡手術と変遷し、現在はロボット支援手術という時代を迎えています。消化管外科学分野では、優れた手術成績を追求するだけでなく、臨床研究・基礎研究にも注力し、新たな技術で世界をリードすることを目指しています。日々情報を発信しながら、未来の医療を切り拓いて参ります。

器官システム制御学講座

呼吸器外科学分野

DEPARTMENT OF THORACIC SURGERY

教授
大久保 憲一

呼吸器外科学分野は、肺・縦隔・胸壁・横隔膜など呼吸器疾患の外科診断・治療についての診療・研究・教育を行います。

主な対象疾患は肺癌・転移性肺腫瘍など悪性肺腫瘍、肺真菌症・抗酸菌症など炎症性肺疾患、気胸・肺嚢胞症など気腫性疾患、膿胸・悪性胸膜中皮腫・胸壁腫瘍など胸膜・胸壁疾患、および縦隔疾患です。

低侵襲化は外科学の趨勢であり、予後が期待できる早期肺癌や良性疾患に対して、内視鏡を用いた低侵襲手術を行います。難治性胸部悪性疾患の治療は外科教室のテーマであり、外科治療を含む集学的治療で治療成績向上を目指します。臨床からの課題をベンチに持ち込み、現場の治療に反映できる、生命予後向上ならびにQOL改善に繋がる研究を行います。

先端医療開発学講座

包括病理学分野

DEPARTMENT OF COMPREHENSIVE PATHOLOGY

教授
石川 文彦

包括病理学分野では、腫瘍、変性、自己免疫など多岐にわたる疾患の診断を担当しています。診断の過程では、体内の異常で複雑な現象や、それを抑えようとする免疫の作動、疾患の発症・増悪に関与する間質の役割なども理解します。多様な疾患の診断に資する基盤から、疾患がなぜ発症し、どのように患者さんを助けることができるかに考えを巡らせること

で、研究へと展開しています。難治性白血病を含む腫瘍性疾患を対象に、新しい治療を開発することで次世代の医療を拓き、世界へ発信したり、海外と連携したりすることで、グローバルに貢献することを目指しています。そのために、国籍だけでなく、考え方、個性、専門性など、ダイバーシティーを大切にチームを形成しています。

先端医療開発学講座

臨床解剖学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL ANATOMY

教授
秋田 恵一

臨床解剖学分野は構造の解剖学的発生学的基盤の形成を行うことを通じて臨床医学のサポートを行っています。人体解剖学の教育は全身を扱うものであるため、臨床家の全身についての疑問に対して答えられるよう、研究領域は多岐にわたっています。その一方で、特定の手術法や診療技術に左右されることないよう努めています。そのためには、古典的ではありますが人体の解剖によってありのままに

観察し、形態をその組織学的性質も含めて表現し、示説することを目指しています。

鏡視下手術の発展に伴い、これまでのマクロ解剖学とミクロ解剖学の中間の領域である「メゾ解剖学」的解析が求められています。我々は、実験発生や発生生物学的手法を用いた解析も行いながら、その領域の研究の発展のために貢献していきたいと考えています。

先端医療開発学講座

分子腫瘍医学分野

DEPARTMENT OF MOLECULAR ONCOLOGY

教授
田中 真二

悪性腫瘍、特に難治性である「肝がん」「膵がん」「スキルス胃がん」などの克服を目指し、「がん」の分子生物学的研究から新規治療法の研究開発まで行っています。「がん」はもちろん、癌細胞が生み出すものですが、疾患としての「がん」は生体内の宿主反応、微小環境など様々な因子の複合体によって成り立っています。すなわち癌克服のためには、「がん」という疾患の

臨床情報や手術検体に基づいてベンチのbasic researchを進め、その先進的成果をベッドサイドのtranslational researchへと展開する両輪の研究を推進する必要があります。

分子腫瘍医学分野は、がんの発生、進展、転移などの分子メカニズムの解明により新規治療法を開発し、次世代の若手研究者育成を目指しています。

先端医療開発学講座

システム発生・再生医学分野

DEPARTMENT OF SYSTEMS BIOMEDICINE

教授
浅原 弘嗣

システム発生・再生医学分野では、慢性炎症性疾患、筋骨格系疾患、がんなどの未解明の難治疾患をターゲットに、RNAと転写因子を切り口に、ハイスループット・ロボティクスシステム開発やゲノム編集などの研究手法の開発を通して、医学研究のエッジを開拓しています。

筋骨格系、関節炎をはじめとして、脳神

経、生殖細胞、自己免疫疾患、血液、消化器、とヒトのおおよそ全ての臓器・組織を網羅して、そのストラテジーもオリジナルのデータベースやライブラリーの構築を基盤としながら、次世代を担う研究者とともに、純粋なサイエンスと医療への応用の両輪で挑戦しています。

疾患モデル動物解析学分野

DEPARTMENT OF EXPERIMENTAL ANIMAL MODEL FOR HUMAN DISEASE

教授
金井 正美

当分野では、疾患モデル動物の開発と解析を実施しています。2021年日本では12人に1人が体外受精で誕生し、わが国は文字通りの生殖補助医療先進国家です。見かけ上健康な体外受精胚を母体へ移植したとしても、胚移植あたりの受胎成功率は約20%で、35歳を転機に流産率は上昇します。その原因は胚そのものもしくは着床不全すなわち母体子宮環境にあります。そこで私たちは、着床不全

や早期卵胞閉鎖症といった女性生殖機能に関する研究を中心に、可視化することが難しい母体内環境に対してin vivo imagingし、原因因子を分子レベルで探索することで、治療へ繋げるトランスレーショナルリサーチを目指しています。また実験動物センターとして、最先端技術を持って発生工学や各種実験サポートし、本学の国際的な研究レベルの推進に努めています。

血液内科学分野

DEPARTMENT OF HEMATOLOGY

教授
森 毅彦

血液内科学分野では造血器腫瘍と再生不良性貧血などの良性血液疾患の診療と研究を行っています。遺伝解析を含めた診断法、分子標的薬を中心とした新規治療薬の導入、造血幹細胞移植・CAR-T療法などの細胞療法を積極的に取り入れた診療を行っています。研究面では新規治療法・支持療法の開発を目的とした数多くの臨床研究、リバーストランスレーショナル研究に重点を置いた基礎研

究を展開しています。教育面では卒前・卒後教育において正確な診断のプロセスと血液疾患全般の高い診療能力を習得することを目標としたプログラムを構築して、提供しております。1人でも多くの患者様を救うべく分野一丸となって診療に全力を注ぎ、また血液内科学の発展と高いresearch mindをもった血液内科医の育成に努めております。

分子内分泌代謝学分野

DEPARTMENT OF MOLECULAR ENDOCRINOLOGY AND METABOLISM

教授
山田 哲也

人体は約60兆個、270種類以上の細胞によって形成され、種々の細胞は多様な組み合わせによって臓器を構成しています。個体の恒常性は、様々な細胞/臓器が協調して機能すること、つまり臓器間ネットワークの働きによって維持されていますが、その為には内分泌・代謝系と呼ばれるネットワークの統御機構の働きが不可欠です。糖尿病・内分泌・代謝疾患は、精妙に制御されている臓器間ネット

ワークの破綻の結果とも捉えることができます。分子内分泌代謝学分野/糖尿病・内分泌・代謝内科は、様々な臓器の働きを個体レベルで調節している代謝・内分泌系を専門とし、全身を俯瞰するマインドで研究、診療を推進しています。これらを通じて糖尿病・代謝疾患や内分泌疾患の更なる病態解明や新規診断法・治療法の開発や、次世代の医師、医学研究者の育成にも努めています。

肝胆膵外科学分野

DEPARTMENT OF HEPATOBILIARY AND PANCREATIC SURGERY

講師
赤星 径一

当科は肝臓、胆嚢、胆管、膵臓、脾臓領域の悪性腫瘍、炎症性疾患などに関して手術・薬物療法を含めた総合的治療を行う診療科です。切除困難な進行がん治療に取り組む一方で、低侵襲手術（ロボット手術・腹腔鏡手術）を積極的に導入しています。肝癌、膵癌においては手術と薬物療法の組み合わせ治療（コンバージョン治療、ネオアジュバント治療）を行って癌の予後の最大化を目指しています。神経内

分泌腫瘍の患者さんが全国から集まっており、診療上の特徴の一つになっています。手術・薬物療法・放射線治療・ゲノム医療など様々な先進的な治療手段の長所短所を比較検討して、患者さんにとって最も有効な治療手段が選択できるようサポートしています。また臨床検体や臨床データを活用して、肝胆膵難治癌の新たな治療戦略の基盤となる基礎的研究にも力を注いでおります。

整形外科学分野

DEPARTMENT OF ORTHOPAEDIC AND SPINAL SURGERY

教授
吉井 俊貴

高齢化社会の到来とともに健康寿命の延伸が我が国の喫緊の課題となり、整形外科診療の重要性は高齢者の運動機能の維持改善を担う診療科としてますます増大しています。私たちは、バランスのよい臨床研究と基礎研究により、我が国の整形外科発展の一翼を担ってきました。臨床研究としては、前向き試験による頸椎前方手術の優位性確認、合併症分析、大規模データベース解析、多施設臨床研

究、脊髄機能モニタリングによる安全性向上、骨軟部悪性腫瘍における切除境界線の明確化などを行ってきました。基礎研究としては、骨形成のメカニズムの解明、新しい人工骨素材の開発と臨床応用、脊髄磁界体外測定器の開発、ウェアラブルデバイスによる動態解析などを通じて、より効果の高い新規検査・治療法の開発を目指しています。

画像診断・核医学分野

DEPARTMENT OF DIAGNOSTIC RADIOLOGY AND NUCLEAR MEDICINE

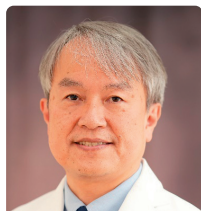
教授
立石 宇貴秀

画像診断・核医学分野は高度な知識と技術を要する専門職の養成を目指し、放射線を用いて病態や解剖学的構造を視覚的に評価し、正確な診断を行うための専門的なスキルや知識を教育することを基本としています。生物物理学、医療倫理、放射線被ばくのリスク評価や患者のケアに関する幅広い要素を包括的に統合し患者の健康を守りながら高度な医療診断を行うことを目指しています。教育研究・医

療の拠点機能を担うことをその使命とし、本学のミッションを具現化する基本方針のもとに実施しています。自ら課題を見つけ探究する姿勢と様々な問題を解決する能力を備えた人材育成に向けて、共通教養教育において「問題提起」「技法の修得」「専門との連携」を展開し、それを踏まえた専門教育を放射線医学の観点から考案し実施しています。

応用再生医学分野

DEPARTMENT OF APPLIED REGENERATIVE MEDICINE

教授
関矢 一郎

変形性膝関節症（OA）は関節軟骨が摩耗し、膝の痛みを引き起こす疾患で、国内の膝痛患者は約1,000万人と推定されています。現在、OAの進行を抑えるための保存療法はありません。また、半月板切除術はOAのリスクを高めることが知られています。私たちは基礎研究において、滑膜由来の間葉系幹細胞（滑膜幹細胞）移植が半月板修復を促進できることを示しました。さらに、医師主導治験を実施し、

2023年にはこの治療法が多くの医療機関で適切に実施できるかを検討するための多施設企業治験を開始しました。また、動物OAモデルの膝に滑膜幹細胞を関節注射することで、OAの進行を抑制できることを示しました。その後2023年にはOA膝に滑膜幹細胞を注射する医師主導の治験を開始しました。私たちの目標は、これらの低侵襲で実施できるOAの再生医療を普及させることです。

ゲノム健康医療学分野

DEPARTMENT OF PERSONALIZED GENOMIC MEDICINE FOR HEALTH

教授
石川 欽也

当分野は、病院の長寿・健康人生推進センターを基盤にして、ゲノムの情報に基づく個人レベルの健康維持、疾病克服、薬剤応答性を理解する研究を推進する目的で、2018年度に設置されました。2020年度に最初の博士課程入学者に始まり、2023年度には最初の入学者2名が学位を取得して卒業致しました。現在博士課程4名、修士課程2名が学んでおります。講義は先制医療の研究基盤を紹介する先

制医歯理工学概論Ⅰ、Ⅱ、Ⅰ英語、先制医療学実習を行い、今年度からがんプロでの講義も担当します。研究は、生活習慣病に関する遺伝的リスク算出と、長寿・健康人生推進センターでの実装化を行うと共に、単一遺伝性疾患の脊髄小脳変性症に関して、学内外の関係分野と共同で病態研究を進めており、画期的な治療薬の開発につながる成果が上がることを期待しております。

形態情報解析学分野

DEPARTMENT OF PATHOLOGY AND ANATOMICAL SCIENCES

教授
星 治

学部教育では、組織学を含む解剖学全般および生理学の基本を系統的に教授しています。その上で、解剖学実習・生理学実習の指導をしています。研究は、超解像顕微鏡や原子間力顕微鏡などの顕微鏡技術を用いて、生体組織のナノレベルの微細構造を観察し、新たな科学的知見を得ることに主眼をおいて進めています。病理学（担当：副島 友莉恵）学部教育では、まず病理学総論・各論について系統

的に学び、病理検査学講義・実習では、疾病の診断や病因・病態の解明に寄与し得るような知識と技術を身につけられるようにしています。研究面では、肝・胆道系腫瘍における分子病理学的解析、細胞診画像解析システムの開発と学習コンテンツの作成、カンボジア・ラオスなどの開発途上国における病理検査室発展へのアプローチに取り組んでいます。

生命情報応用学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL INFORMATION AND APPLIED SCIENCES

教授
角 勇樹

生命情報応用学分野は、2018年3月までは生命機能情報解析学、2022年3月までは呼吸器・神経解析学の名前で活動していました。2018年に保健衛生学科から医歯学総合研究科に改組、2022年に保健衛生学科の再編成があり名称を変更いたしました。現在のメンバーは教授 角勇樹：臨床 呼吸器内科医、研究 AI,肺疾患

の遺伝子治療、准教授 赤座 実穂：臨床 神経内科医、研究 脳波、末梢神経検査、助教 河原 智樹：臨床 小児科医、研究 公衆衛生、疫学的解析 で構成されています。教育は臨床医学講義、臨床生理検査学の講義と実習、公衆衛生学の講義と実習を担当しています。

血液・生体システム解析学分野

DEPARTMENT OF HEMATOLOGY AND BIOPHYSICAL SYSTEMS ANALYSIS

教授
伊藤 南

サイバネティクスの創始者ノーバート・ウィーナーが「生体もまたある種の制御システムである」と考えたことはまことに慧眼でした。当分野はシステムのメカニズムをキーワードに各教員の専門性と学際性を活かした研究教育を行っています。伊藤は視覚と触感を統合する素材感覚のメカニズム研究を通じて知覚行動解析と電気生理学の連携を目指しています。西尾は再生医療技術を駆使して造血管腫瘍

の病態解明・新規治療法の開発、褐色脂肪細胞の活性化メカニズムの解明に取り組んでいます。本間は頭部組織における熱伝導モデルをベースにした精密な脳温制御を可能にする脳低温療法の医用支援システムの研究開発に取り組んでいます。教育面では医用工学、血液学に加えて、データの統計解析、専攻横断的な能動学習プログラム、国家試験に向けた成績解析等に取り組んでいます。

疾患生理機能解析学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL AND DIAGNOSTIC LABORATORY SCIENCE

教授
柿沼 晴

当分野は、検査技術学専攻での学部教育として、臨床生理機能検査学、臨床病態学、遺伝子染色体検査学、英語科目などの講義と実習とを主たる担当として、学生教育を進めています。大学院教育及び研究としては、消化器疾患、循環器疾患の病態生理を明らかにして、新たなバイオマーカー、治療標的を探索する目的で、研究を進めています。研究内容としては、主としてヒトiPS細胞を用いた肝疾

患病態モデルの構築、慢性肝疾患における線維化と発がんの分子機構、パネート細胞に着目した炎症性腸疾患の病態解明、細胞外小胞を介した心臓細胞間伝達について、細胞生物学的な視点を中心に多角的な視点から研究を展開しています。私達は、研究活動を通じて科学的な思考を身に着けた、臨床医学の発展に貢献できる人材の教育に力を入れています。

臨床分析・分子生物学分野

DEPARTMENT OF CLINICAL BIOANALYSIS AND MOLECULAR BIOLOGY

教授
大川 龍之介

臨床検査学の分類における「臨床化学」を教育・研究の柱に据え、「心血管疾患発症リスクを予見可能な血清バイオマーカーの開発」というテーマの下、研究を支えるに十分な技術および高精度な測定法を開発する能力を養います。研究成果を論文や学会で発表し、社会に還元するという使命とともに、次代の臨床検査を発展的に継続できる人材の育成が重要であると考えています。鈴木グループは、遺

伝子改変マウスやその他分子生物学的解析法を用いて、主に中枢神経系の髄鞘形成のメカニズム解明と関連疾患の診断・治療、QOL向上への応用を目指した基礎研究を展開しています。教育面においては、これらの研究を通した大学院生の研究指導、学部では、基礎生化学の講義・実習を通して、医学・臨床検査学の人材育成に努めています。

微生物・感染免疫解析学分野

DEPARTMENT OF MOLECULAR MICROBIOLOGY AND IMMUNOLOGY

教授
齋藤 良一

当分野は、2018年度組織改組に伴い、生体防御検査学分野が免疫病態検査学分野及び分子病原体検査学分野に分離後、2023年度に再統合して誕生しました。病原微生物学と感染免疫学を基盤として感染症や免疫疾患の診断、治療、制御に関わる標準的及び先進的な微生物学的・免疫学的解析法の教育のほか、病態の分子機序解明等に資する基盤能力強化を目指した教育も推進しています。

研究では、齋藤、太田が細菌の環境適応や進化的動態、環境微生物叢と薬剤耐性の相互作用等に関する研究を、田中が移植後日和見感染症の多ウイルス特異的免疫細胞療法等に関する研究を行い、専門領域を中心とした国際的学際的研究を推進できる次世代の教育研究者の育成に努めています。病院感染制御部や研究基盤クラスターの一部業務を担当し医療や研究連携に貢献しています。

ヘルスサービスリサーチ看護学分野

DEPARTMENT OF NURSING HEALTH SERVICES RESEARCH

教授
柏木 聖代

ヘルスサービスリサーチ看護学分野では、ヘルスサービスリサーチ(Health Services Research)に取り組んでいます。ヘルスサービスリサーチは、社会的要因、報酬体系、サービスの構造(structure)やプロセス(process)、アウトカム(outcome)、医療の質、サービス利用、コスト、アクセシビリティ、政策変更の影響等を科学的

に探究する学際的な研究分野です。

当分野は、エビデンスに基づく政策立案を推進するために、看護の立場からヘルスサービスリサーチに取り組み、その研究成果を世界に発信することを通じて、質の高い看護サービスが必要な人に提供される社会実現の一助となることを目指しています。

公衆衛生看護学分野

DEPARTMENT OF PUBLIC HEALTH NURSING

教授
月野木 ルミ

公衆衛生看護学分野は、2021年4月に月野木ルミが地域保健看護学分野に就任し、2023年4月に地域健康増進看護学分野と分野統合して新設された分野です。学部教育は、地域で活躍する看護職と探求力とリーダーシップを備えた保健師の育成を行っています。保健師課程教育では、2017年度に30名程度の選抜制を開始し、2023年度入学者から20名に定員変更を行い、教育の高度充実化を図ってい

ます。大学院教育では、国際的な研究者や自治体や国の施策に貢献できる実践家のリーダー育成に努めています。

研究では、公衆衛生を専門として、特に循環器疾患と危険因子との関連の疫学的解明と予防方法の開発に最近では力を入れており、多くのエビデンス創出を行うと共に厚労省の特定健康診査・特定保健指導制度などの政策への貢献に努めています。

成人看護学分野

DEPARTMENT OF ADULT HEALTH NURSING

教授
田中 真琴

近年のめざましい医療技術の発展に伴い、高度医療によって救命や延命される機会が向上しました。また、難治性の慢性疾患に関しても、新しい治療法が開発が進んでおり先端医療の恩恵を受ける人々も増えています。成人看護学分野では、このような状況下にある患者や家族の苦痛等を緩和し、その人らしく生活できるよう支援するために、また病気とうまく付き合っていけるよう支援するために、

重篤期から回復期、セルフマネジメントに至るまで、さらには緩和ケアを含めた専門的看護のあり方と看護支援方法に関する教育や研究を行っています。当分野がこれまで担っていた「クリティカルケア看護専門看護師教育課程」の教育は他分野が行うことになり、分野名を2023年4月より「先端侵襲緩和ケア看護学分野」から成人看護学分野へと変更しました。

臨床看護開発学講座

精神保健看護学分野

DEPARTMENT OF MENTAL HEALTH AND PSYCHIATRIC NURSING

教授
谷口 麻希

当分野では、看護援助に関する研究にとどまらず、精神保健看護に関する幅広いテーマで研究を行っています。具体的には、精神保健疫学調査、心理・行動を測定するための尺度開発、プログラム開発およびその効果検証などです。これにより、精神的な健康に関する問題やリスクを予防するとともに、精神疾患を持ちながらも、その人らしく生きることのできる手法の開発や仕組み作りに寄与すること

を目指しています。主な研究テーマは、子どもと親のメンタルヘルス、精神疾患患者とその家族への支援、精神保健・看護領域における多職種連携、精神疾患患者の退院および地域生活促進等です。最近では、新しいテクノロジーを活用した支援方策の開発にも積極的に取り組んでいます。これらの研究活動を通して、多様な場で、心のケアに対する人々のニーズに応えていきたいです。

臨床看護開発学講座

小児・家族発達看護学分野

DEPARTMENT OF CHILD AND FAMILY NURSING

准教授
岡光 基子

当分野は、少子化が進む中で、子どもとその家族への支援の重要性が高まっている現状に対応し、Life-span Developmentの視点から小児看護の実践家を育成しています。包括的なアプローチを重視した支援モデル開発や小児看護の発展に貢献できる研究者の育成を行っています。研究では、乳幼児精神保健を基盤とし、親子の健やかな発達と well-being を促進

することを目指し、子どもとその家族に対する育児支援システムの構築を主要なテーマとして取り組んでいます。また、専門職を対象とした講習会を開催し、スキルと質の向上を通じて虐待予防に繋がることを目指しています。今後も、子どもと家族の健康と幸福を追求し、課題解決に取り組み、社会に貢献するために努力を続けてまいります。

臨床看護開発学講座

リプロダクティブヘルス看護学分野

DEPARTMENT OF REPRODUCTIVE HEALTH NURSING

教授
松崎 政代

当分野は2023年に新たなメンバーを迎え、革新的な研究および教育活動を展開しています。私たちのミッションは、リプロダクティブヘルス・ライツ(性と生殖に関する健康と権利)を中心とした研究を行い、その成果を世界に発信することです。また、産学連携および地域連携を通じて、研究成果の実装も積極的に推進しています。

教育面では、研究力と高度な実践力を兼ね備えた助産師および研究・教育者の養成を目指し、大学院に助産師教育コースの設立を計画中です。大学院では、量的・質的な研究手法を取り入れ、周産期および女性のライフステージ全体を視野に入れた看護学・助産学を基盤に、研究力を涵養します。学部教育では、母性看護学の基礎から応用までを包括し、演習や実習を通じて実践的な知識を提供しています。

臨床看護開発学講座

在宅・緩和ケア看護学分野

DEPARTMENT OF HOME HEALTH AND PALLIATIVE CARE NURSING

教授
福井 小紀子

これから急速に進む超高齢・人口減少社会に対応するため、在宅ケアと緩和ケアの重要性は増していきます。当分野では、在宅で暮らす人々や看取り期の人々が尊厳をもって豊かに過ごせるよう、医療と生活の側面から支える方法を看護学の視点で研究しています。主な研究テーマは、見守り機器や介護ロボットを活用した産学連携研究、ビッグデータを用いたケアの効果のエビデンス化、在宅緩和

ケア、施設看取りなどの個別ケアの発展に寄与する研究、また、医療介護連携やスタッフ教育に関する研究です。これらのテーマを通じて、“DX”、“ビッグデータ”、“個別ケア”、“連携・教育”をキーワードに、他分野の研究者と協働し、また企業や行政と連携しながら社会的ニーズに看護が応えることを目指して、幅広い研究を展開しています。

先導的看護システム開発学講座

国際看護開発学分野

DEPARTMENT OF INTERNATIONAL NURSING DEVELOPMENT

教授
近藤 暁子

本分野は、世界の看護をリードする卓越した教育・研究遂行能力を持つ人材を育成することを目的としています。学部教育に院生を活用し、オンラインにより海外の大学とも共同講義を行い、異文化間感受性能力の向上を目指し、米国ワシントン大学での海外研修を実施しています。また、学部から英語の論文を読み、英語で卒業論文を書けるよう支援しています。大学院教育では英語やゼミはすべて

英語で行い、留学生を積極的に受け入れ、国際的視点の滋養と看護国際人に必要なアカデミックマナーの習得を支援しています。当分野の研究活動は、主に成人を対象とし、在日外国人の医療問題、メンタルヘルス、異文化を持つ患者への対応に関するもの、レジリエンスやコントロール感と健康との関連等、国際比較を行うことで、有効な健康支援策を検討しています。

先導的看護システム開発学講座

看護管理・高齢社会看護学分野

DEPARTMENT OF NURSING MANAGEMENT AND GERONTOLOGY NURSING

教授
緒方 泰子

当分野は、2020年度に、当時の「看護システムマネジメント学分野」と「高齢社会看護ケア開発学分野」が統合されてきた分野です。看護管理やマネジメント、老年看護学に関する授業や研究に取り組んでいます。大学の理念に基づき、分野で作成した理念を掲げ、教育・研究活動に取り組んでいます。研究テーマとしては、高齢者への看護やケアの仕組みに関すること、組織の管理やマネジメントに関す

ること、両者の重なり合う研究テーマ、更に他分野における研究アプローチを重ね合わせた研究テーマ、というように、挑戦的で新規性の高い研究課題にも取り組んでいます。また、国際共同研究にも力を入れています。大学統合後も、未来を生きる人々の幸福に貢献できるような研究を行い続けるとともに、そうした未来に貢献できる研究者・実践者を育成し続けていきます。

災害・クリティカルケア看護学分野

DEPARTMENT OF DISASTER AND CRITICAL CARE NURSING

教授
佐々木 吉子

災害・クリティカルケア看護学分野は、人びとの「健康危機」に注目し、災害、外傷、重篤疾患の急激な発症や悪化、および高侵襲治療などにより、心身の危機的状況にある人々（被災者、患者、家族など）に焦点を当て、救命や危機状況からの回復促進、危機状況を回避するために有効な看護技術や予防的活動の探究を目的として、教育・実践・研究を展開しています。健康レベルの高い人々やリスクのあ

る人々に対しては、大災害への備えとして、企業等の発災時の初動や帰宅困難者対策の支援、病気を持つ人が安心して災害後の生活を送ることができるための研究活動を行っています。また大震災や感染症パンデミックを経験した人々や家族に注目した探索的研究を行い、健康危機からの回復促進やよりよい看取りのための看護技術の考案に向けても検討しています。

共同災害看護学専攻

TRACK OF COOPERATIVE DOCTORAL COURSE IN DISASTER NURSING

教授
佐々木 吉子

本専攻は、高知県立大学、兵庫県立大学、千葉大学、日本赤十字看護大学、および東京医科歯科大学の5大学で共同運営する5年一貫制博士課程です。

構成大学が蓄積してきた災害看護の経験や資源を活かして、災害看護の深奥を極め、人々の健康社会の構築と安全・安心・自立に寄与すること、また、災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決

するために、学際的・国際的指導力を発揮できる災害看護グローバルリーダーを養成することを目標としています。

本学では、主に大規模災害発生時の防災・減災に向けた備えと発災急性期における看護の役割に着目して、学内はもとより地域住民、行政、医師会、企業等と連携した大災害への備えをテーマに研究活動を展開しています。

肝臓病態制御学講座

DEPARTMENT OF LIVER DISEASE CONTROL

寄附講座教授
朝比奈 靖浩

肝がん・肝不全への進展阻止および根本治療の確立は重要課題です。我々が治療開発に注力してきたウイルス性肝炎については、漸くウイルス排除や制御が可能となってきましたが、ウイルス制御下の病態進展や非ウイルス性の肝疾患が急増するなど、肝臓領域における解決すべき課題は未だ山積しています。本講座は消化器病態学分野に関連する寄附講座として設立され、次世代の医学・医療のため

に、基礎研究に基づく病態解明、新規治療法および診断法の開発と、臨床研究の推進を目的としています。先進的な基礎研究と臨床研究とを融合させ、肝病態形成の分子機構や、肝再生・幹細胞の分化調節機構の解明、および医用工学を駆使した診断・治療技術の開発等を通して臨床現場に還元するとともに、肝臓分野をリードする次世代の臨床科学者の育成に取り組んでいます。

軟骨再生学講座

DEPARTMENT OF CARTILAGE REGENERATION

寄附講座准教授
中川 裕介

変形性関節症は、関節軟骨の退行変性を伴う慢性疾患で、疼痛、可動域の低下、変形などにより患者のQOLを著しく低下させる疾患です。高齢化社会の本邦においては罹患患者数が増加しており、整形外科領域で最も重要な運動器疾患の一つです。本講座は基礎研究では関節痛の発症と慢性化の機序の解析及び新規薬剤の開発や、手術モデル動物を用いた組織修

復の解析や修復促進のための治療法の開発を行っております。臨床研究では人工股関節置換術のナビゲーションの開発や人工膝関節置換術にロボットアームを導入し、その治療成績の検討を行っております。これらの研究を通じて、変形性関節症に対する治療法の進歩に貢献することを目標としています。

消化管先端治療学講座

DEPARTMENT OF ADVANCED THERAPEUTICS FOR GI DISEASES

寄附講座准教授
永石 宇司

消化管先端治療学講座は、潰瘍性大腸炎やクローン病に代表される炎症性腸疾患の研究に特化し、「海外へ発信できる画期的な疾患制圧戦略」の構築を目指した活動を展開する大学院設置寄附講座です。複数企業の支援に基づく先端技術と情報を共有のもと、これを利用した先端研究を推進しています。

具体的には、本学消化器病態学講座と

共同し、臨床の場から課題を抽出し、新しい視点に基づいた研究を展開し、そしてその成果を臨床現場に還元する「クリニカル・サイエンス」を進めることで、独創的な難治性炎症性腸疾患の制圧戦略を確立することを目指しています。また、大学院教育を通じて、次世代の基礎・臨床研究を推進する優れた研究者を育成することを目的としています。

整形外科外傷外科治療開発学講座

DEPARTMENT OF ORTHOPAEDIC AND TRAUMA RESEARCH

教授
吉井 俊貴

医学の進歩により社会の高齢化が進み、健康寿命（自立して動ける寿命）を延ばすことが重要な課題となっています。健康寿命を損なう原因として骨折・転倒などの外傷は大きなウェイトを占めていることから、本講座では整形外科治療を主な対象として骨形成薬の開発や骨折の発症や治癒メカニズムについての研究を行っています

骨折治癒のメカニズムは骨再生の生理

にも深く関わることから、さらに発展させ石灰化疾患や異所性骨化疾患の解明も行っています。また研究は整形外科学分野と連携して行っており、再生医療の分野では主に骨再生法の開発や、それに関連した人工骨の開発・評価などのトランスレーショナルリサーチを、変性疾患に関する分野では関節軟骨の変性や細胞の老化に関する研究などを進めています。

呼吸・睡眠制御学講座

DEPARTMENT OF RESPIRATORY PHYSIOLOGY AND SLEEP MEDICINE

寄附講座准教授
立石 知也

人生の3分の1を占め、睡眠の不足や質低下は心血管障害、認知機能障害につながることが知られています。近年そのメカニズムの解明、治療介入の重要性は高まっています。本講座は臨床・研究を通じた「快眠」の提供を目的として2009年6月に設立されました。呼吸器内科、精

神科、耳鼻科、歯科を中心に多くの科が連携し、閉塞性睡眠時無呼吸症、不眠症などの睡眠障害の診療、研究に尽力しています。「快眠」を通じて患者さんのQOLを改善することを目標として、人材育成にも注力しています。

茨城県小児・周産期地域医療学講座

DEPARTMENT OF PEDIATRICS, PERINATAL AND MATERNAL MEDICINE (IBARAKI)

寄付講座教授
【小児科】
高木 正稔寄付講座准教授
【産婦人科】
石川 智則

2010年4月に設立された官学連携寄附講座であり、小児科と周産・女性診療科の各3名にて構成されています。本大学病院における小児・周産期医療の充実と、土浦協同病院との連携を基軸とした茨城県内小児・周産期医療の再生が目標です。

本講座が中心となり学内周産期診療が充実したことで、2015年4月1日に地域周産期母子医療センターに認定されました。学生や研修医教育・養成と確保の充

実により、小児科、周産・女性診療科ともに医局内医師数は増加し茨城県内医師不足地域へも派遣を行っています。双方向ビデオカンファレンスシステムを導入し、大学と土浦協同病院間の診療・研究・教育面での連携が充実し、文部科学省の課題解決型高度医療人材養成プログラムにも採択され、筑波大学と共同で「ITを活用した小児周産期の高度医療人材養成」事業を推進中です。

血管代謝探索講座

DEPARTMENT OF NUTRITION AND METABOLISM IN CARDIOVASCULAR DISEASE

寄附講座特任准教授
江川 真希子

本講座は、先進倫理医科学分野に関連する寄附研究部門として設立され、教育・研究活動の多くは、大学院医歯学総合研究科先進倫理医科学分野と共同で運営しています。本講座では、生活習慣病の基盤病態である動脈硬化症の進展機構の解明を目指し、その主座である血管をターゲットとした研究を実施することを目的としています。主な研究テーマは1)「血管の炎症」と捉えられている動脈硬化症発

症の新規メカニズムの解明と新規創薬ターゲットの探索、2) 妊娠・出産が心血管系へ与える影響の解明とリスク因子の抽出、女性の長期的な健康管理への活用、3) 脂質異常症の遺伝学的診断や管理、なかでも代表的な疾患である家族性高コレステロール血症（FH）を中心に脂質異常症と診断された女性の安全な妊娠・出産管理に関する検討などです。

茨城県腎臓疾患地域医療学講座

DEPARTMENT OF NEPHROLOGY AND REGIONAL HEALTH (IBARAKI)

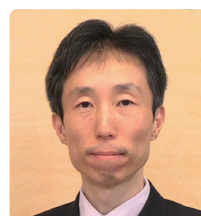
寄附講座准教授
飯盛 聡一郎

本講座は茨城県厚生農業協同組合連合会のご支援のもと、茨城県内の医師不足地域における腎臓疾患の地域医療を充実させ、医療の向上に寄与することを目的として開設されました。研究では慢性腎臓病の進展阻止に関する基礎研究・臨床研究を推進し、患者さんに還元できるように研究成果を世界に発信しています。

教育では医学部学生への腎臓内科学の卒前教育、初期研修医および専攻医への臨床教育、大学院生への研究指導を行っています。臨床では大学病院にて腎臓疾患を中心に幅広い疾患に対応できる医師を育成し、地域医療に貢献できるように努めています。

先進不整脈学講座

DEPARTMENT OF ADVANCED ARRHYTHMIA RESEARCH

寄附講座准教授
宮崎 晋介

不整脈学は日進月歩の分野であり、カテーテルアブレーション、植込み型心臓デバイス治療、薬物治療ともこの20年間で大きく様変わりしました。2018年より本学に設置された先進不整脈学講座では、特に難治性不整脈に対するアブレーション治療、デバイス治療に力を入れています。臨床では欧米の一流施設へ留学経験を有したスタッフによる、世界標準の治療を目標としています。研究では診

断学より治療学の比重が高いため、治療成績の向上につながる臨床研究が中心になっています。アブレーションやデバイス治療による患者予後改善の評価を行うほか、新たに開発・導入された機器の臨床的有用性の評価や、実験的手法による有用性・安全性の評価を行うと共に、実臨床から得られる疑問を解決すべく、多施設共同研究を含む様々な研究を行い、世界への発信を進めています。

消化器連携医療学講座

DEPARTMENT OF COLLABORATIVE MEDICINE FOR GASTROENTEROLOGY AND HEPATOLOGY (CMGH)

寄附講座准教授
藤井 俊光

本講座は大学と地域医療における医療、教育、研究の連携を強化し、大学の全人的医療実践による医療人育成に寄与することを目的に東京医科歯科大学と茨城県厚生連の産学連携により設立されました。

大学と土浦協同病院が中心となり構築した情報共有化と教育研修支援システムに基づいて、同病院をマグネットホスピ

タルとして医師の養成と集約化を促進し、消化器疾患診療における東京医科歯科大学・土浦協同病院コアネットワークを形成、地域医療の向上を図っています。さらに、大学の専門分野である難病診療ではweb会議システムを用いた常設の難病診療支援システムにより広域の病病連携を日常的に稼働させています。

小児地域成育医療学講座

DEPARTMENT OF CHILD HEALTH AND DEVELOPMENT

寄附講座教授
金兼 弘和

本講座は2018年7月に公益財団法人柏市医療公社によって設立された寄附講座です。その目的は急性疾患の医療・小児保健を想定した「小児医療」に加え、慢性期への移行・難治疾患患者の長期的診療・小児の健全な成育を包括する医療である「成育医療」をその基本理念とし、首都圏郊外中核都市における地域医療に密着した成育医療システムの確立、および次世代医療に対応する小児科医の人材育

成を目的としています。高度専門医療を行う東京医科歯科大学と、小児人口の多い柏市の中核病院である柏市立柏病院の有機的連携を基盤として、調査研究と教育を実施しています

成人疾患は小児期にその萌芽があるという考えから、成人期以降に顕在化する難治疾患を1つのモデルとして、成育医療体系を継続的に模索しています

東京都地域医療政策学講座

DEPARTMENT OF TOKYO METROPOLITAN HEALTH POLICY ADVISEMENT

教授
岡田 就将

当分野では、保健医療サービスの効果的提供をもたらす政策を明らかにし、その実現・普及のため研究及び教育に取り組んでいます。政策が多様な学術領域の上に成り立つとともに、これらサービスも高度に複雑化していることを踏まえ、実践を通じた知見の獲得およびその知見に基礎を置いた政策実現のプロセス構築に活動の主眼を置いています。現在の主なテーマは、医療におけるICT技術の普及、

持続可能性と産業化を両立させる医療機器評価制度、在宅医療、終末期医療、医療の国際展開等です。前述の議論の場の中心は、本学大学院修士課程に設置されている医療管理政策学コース(MMAコース)であり、医療政策の中心を担う省庁関係者、病院関係者、企業関係者らが集い、立場を越えた意見交換を行いながら、合意点を見出し社会への実装に向けた取り組みにつなげています。

茨城県北西部地域医療学講座

DEPARTMENT OF COMMUNITY MEDICINE (IBARAKI)

寄附講座教授
石田 岳史

総合診療医学分野の元、介護・在宅医療連携システム開発学分野と密接な連携を取り、臨床・教育・研究活動を行っています。臨床、教育への取り組みとして、教員と総合診療科専攻医を常陸大宮済生会病院へ派遣し、過疎地域における地域医療研修を実施できる環境を整備しました。同院は様々な内視鏡検査・治療、MRIなどの高額医療機器を有する一方、総合診療専門医取得のためのへき地研修要件や地

域医療支援病院の院長になるための要件である「医師少数地域等での勤務歴」を満たす貴重な医療機関でもあります。また臨床研究として「横隔膜エコーと高齢者、サルコペニア、フレイルに関する研究」、「遠隔カンファレンスによる医療の質向上」、「心電図モニタの安全管理」などが進行中で、地域住民及び常陸大宮市に貢献しながら地域と共に成長できる課題に取り組んでいます。

茨城県地域産科婦人科学講座

DEPARTMENT OF WOMEN'S HEALTH

寄附講座教授
寺内 公一

平均寿命世界一を誇る日本の女性が心身ともに充実した生を全うするためには、若年期・中年期から健康の維持に努めることが重要です。「食」は運動と共に生活習慣を構成する最大の因子です。東京医科歯科大学周産・女性診療科では、医師による診療と管理栄養士による健康・栄養教育とを組み合わせる「系統的健康栄養教育プログラム」を通じて、2500名を超える女性の健康維持に関わってき

ました。2012年に「『食』による女性の健康維持」を中心的課題とする寄附講座「女性健康医学講座」が設立され、2020年には「茨城県地域産科婦人科学講座」として再出発しました。今後も様々な領域における女性の身体的・精神的機能の加齢による変化と、食品・薬品およびそれらに含まれる生理活性物質がそれらに与える影響についての研究を推進していきます。

肺免疫治療学講座

DEPARTMENT OF PULMONARY IMMUNOTHERAPEUTICS

教授
宮崎 泰成

2020年10月、新型コロナ肺炎が国民の脅威となっていた最中に、寄附講座である肺免疫治療学講座が本学呼吸器内科を母体として設置されました。新型コロナ肺炎の重症例では、本来は病原体を排除すべき免疫系の過剰反応が関与していることがわかっております。また、気管支喘息、肺癌、アレルギー性間質性肺炎などでも、病状の進行に免疫システムが関与していることがわかっております。近

年、多くの疾患において免疫関連の治療薬が開発され、医療における免疫システムの制御が重要となっております。現在、地域がん診療連携拠点病院、東京都アレルギー疾患医療拠点病院としての役割のある本学において、当講座では肺免疫システムを制御して新たな治療法を開発する事を目指し、臨床・研究・教育と多くの面で幅広く従事しております。

先端人工知能医用画像診断学講座

DEPARTMENT OF ARTIFICIAL INTELLIGENCE (AI) RADIOLOGY

教授
立石 宇貴秀

東京医科歯科大学と医療法人社団豊智会がAI画像診断の構築に耐えうる症例情報を共有し画像診断システム開発を行っています。構築された画像診断装置を臨床にフィードバックしより正確で迅速な画像診断を提供するだけでなく、より低侵襲で被ばく低減に根ざした画像撮影方法を考案し、かつ診療科ベースの要望に応えるべく新たな画像解析方法の開発を行っています。さらに疾患特異的な新規

画像診断薬について基礎・臨床研究を通じて模索・検討しています。また、医療AI人材育成を通じて大規模画像データについてデータ特性・意義やバイアスを理解し、データ標準化と変換及びクレンジングにより解析可能な形式のデータベースを構築し、かつ具体的な医療課題解決と知見創成に必要なデータ処理技術を考案しています。

先端技術医療応用学講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF ADVANCED TECHNOLOGY IN MEDICINE

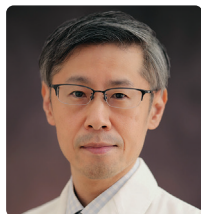
JR講座教授
川端 茂徳

先端技術医療応用学講座は、医療現場のニーズと最先端の工学、工業技術を結びつけ、革新的な医療機器の開発をめざすジョイントリサーチ講座です。2015年に開講し、臨床経験豊富な医師と先端技術を持つ企業、工学者との密接な連携により、複数の医療機器の開発をおこなっ

ています。整形外科、リハビリテーション、循環器科などの分野で、患者さんの人生の質を向上させるための日本発の新しい診断・治療法を世界に発信することをめざしています。本講座は、医工連携、産学連携による医療イノベーションの先駆者として、医学と産業の発展に貢献します。

運動器機能形態学講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF FUNCTIONAL JOINT ANATOMY

JR講座教授
二村 昭元

臨床解剖学分野で構築されてきた解剖学的知見に基づいて、2016年にJA共済総合研究所のお力添えで設置されました。当初は運動器疾患の病態解明のために、関節構造の解剖学的基盤作成を目指してきました。解剖学的知見が集積されるにつれ、転倒や骨折予防に得られた知見を生かす目的で、運動機能やそれに寄与す

るパラメーターの可視化に関わる研究も行うようになりました。近年は、「運動器から全身のヘルスケアに寄与する」をモットーに、精神や心血管機能のみならず、アスリートパフォーマンスとの関連が昨今注視されている「呼吸」という機能をキーワードに研究を行っています。

先端視覚画像医学講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF ADVANCED OPHTHALMIC IMAGING

JR講座准教授
吉田 武史

眼疾患の病態や視機能に対する検査機器と画像解析装置のイノベーションは目覚ましく、これまでわからなかった病態の解明や詳細な治療成績評価が可能になってきています。本講座では、強度近視や緑内障など、不可逆的で重篤な視機能低下をもたらし、根本的な治療法が未だ確立していない最重要眼科疾患について、医学だけでなく化学や光学などの最先端テクノロジーを用い、その病態解明と治

療法確立を目指して研究を行っています。特に多くの眼合併症を生じさせる病的近視眼における診療ガイドラインの作成に力を入れています。研究は眼科分野と連携して行われており、外来診療と眼科手術に最先端テクノロジーをいち早く取り入れることで、現在の診療上の問題解決を図り、重篤な眼疾患を持つ患者の失明を防ぐことで、社会貢献に繋げることを最終目標としています。

細胞構造生理学研究部門(CeSPJRD)講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF CELLULAR AND STRUCTURAL PHYSIOLOGY (CESPJRD)

特別栄誉教授
藤吉 好則

膜タンパク質をはじめとする我々の身体の恒常性維持に関わる分子の立体構造から、生理機能を理解する学問分野を細胞構造生理学と命名して研究を進めています。例えば、我々の身体には60%以上もの水が含まれていますので、水チャンネルやタイトジャンクションなどの膜タンパク質をはじめとする分子が恒常性の維持に重要であることが知られています。それゆえ、これらの構造を解析して、生理

機能を分子構造から理解する研究を進めています。特に独自に開発を進めてきたクライオ電子顕微鏡とそれらを用いた構造解析法の発展によって、より多くの膜タンパク質の構造が高い分解能で解析できるようになってきました。その結果、医学や薬学に有用な詳細な情報が得られるようになり、構造創薬による新しい薬の開発も可能になりつつありますので、細胞構造生理学研究を進めています。

介護・在宅医療連携システム開発学講座

DEPARTMENT OF R&D INNOVATION FOR HOME CARE MEDICINE

JR講座教授
木村 琢磨

総合診療医学分野の元、茨城県北西部地域医療学分野と密接な連携を取り、臨床・教育・研究活動を行っています。臨床的・学問的基盤とし、総合診療・家庭医療学、老年医学を重視し、今後、我が国において益々必要で、医療・社会情勢の影響を多大に受ける介護・在宅医療に関して、「在宅医療におけるInformation and Communication Technology (ICT)

の利用」、「在宅医療の質評価と向上」を念頭に置き研究を行っています。具体的には、「在宅医療における医療と介護の連携、タスク・シフト/シェア」、「在宅医療における生活習慣病患者の適切な検査」、「在宅医療におけるコミュニケーション・会話内容の分析」、「Multimorbidity (多疾患併存) の高齢患者への診療アプローチ」などをテーマに研究を行っています。

ジョイントリサーチ講座

次世代画像装置開発学講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF NEXT GENERATION IMAGING DEVICE DEVELOPMENT



教授
立石 宇貴秀

東京医科歯科大学と株式会社エフ・イー・ティー・ジャパンが次世代画像装置を開発し医師主導治験へ向けたジョイントリサーチ講座を開設しています。現在の医療診断画像撮影に用いられるX線は、1916年に基本構成が発明された高真空熱陰極管によって作られたものを流用しています。半導体を使用した冷陰極X線源とすることによって従来不可能で

あった特性を実現し、医療の高度化に資する事ができます。冷陰極X線源についてはカーボンナノチューブを電子源とする研究が米国、ドイツ、英国、豪州、韓国、日本などで実施されているが、医療撮影のために十分な成果をあげていません。本研究はより優良な半導体冷陰極を用いて実用可能な成果を目指しています。

ジョイントリサーチ講座

サイバー精神医学講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF CYBERPSYCHIATRY



JR講座准教授
治徳 大介

サイバー精神医学講座は、ゲーム行動症(ゲーム依存)、スマホ・ネット依存の病態解明を目指し、2023年10月に開設されたジョイントリサーチ講座です。ゲーム行動症、スマホ・ネット依存の病態は不明で、治療も確立していません。そこで我々は、スマートフォンのログアプリから得られたデータを用いて行動解析を行い、その結果を臨床に還元するためのシステム開発を企業とともにを行っています。さ

らに、これらの行動解析をもとに、複数の医療用アプリ開発に着手し、数年以内の、診断や治療に関わるアプリや、疾患予防アプリの実用化を目指しています。また、ゲーム行動症の実態把握のために、公的機関と連携しながら全国的なゲーム行動症の実態調査をおこなっています。これからも医工連携、産学連携を通して、医学、産業の発展に貢献していくことを目指します。

ジョイントリサーチ講座

生涯免疫医療実装講座

JOINT RESEARCH DEPARTMENT OF LIFELONG IMMUNOTHERAPY



JR講座教授
森 雅亮

急速な社会的関心の高まりを受け、生涯を視野に入れた医療の重要性が指摘され、平成 27年から厚生労働難病政策の充実が図られてきました。時代の要請に応えるものとして、小児から成人まで膠原病・リウマチ性疾患などの免疫難病をシームレスに研究教育する体制を確立することが喫緊の課題でした。その潮流の中、平成 28年4月に生涯免疫難病学講座が寄附講座として開講され、膠原病・リ

ウマチ内科および小児科の協力を得て、「難病に小児科/内科の枠組みなし」の思想のもと、既存講座では達成しえないような免疫難病全般の診療と学問の刷新と充実の先駆となる新講座を展開してきました。その甲斐あって、とくに本講座で取り組んできた「移行期医療」研究は、広く社会に受け入れられるようになり、国の政策の一つとして取り上げるような成果を得ています。

寄稿



医科同窓会 理事長

一般社団法人東京医科歯科大学医科同窓会 理事長

林 洋 *Hiroshi Hayashi*

医学部26回生・1978年(昭和53)年卒業

医学部創立80周年、誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。1944年(昭和19年)に医学科が誕生して以来80年、母校にとって今年は奇しくも節目の年となりました。卒業生の歴史は、医学科1回生(M1)の卒業が1945年(昭和20年)、そして1950年(昭和25年)に医学科4回生(M4)が卒業しました。その後1953年(昭和28年)に大学医学部1回生が卒業し、今年2024年(令和6年)3月に医学部72回生が卒業しました。すなわち、この80年間の間に、計76学年の学生が卒業し、同窓会員となりました。この間の同窓会の歴史は、1944年(昭和19年)の旧東京医学歯学専門学校発足時に全学の同窓会が設立され、1951年(昭和26年)にお茶の水会と改称されました。そして、1963年(昭和38年)にお茶の水会から医学部同窓会が独立しお茶の水会医科同窓会が設立されました。初代会長はM1回生の桐野忠大先生、また、当時の学長は岡田正弘先生、医学部長は清水文彦先生です。そして、昨年2023年(令和5年)に医科同窓会創立60周年を迎え、医科同窓会報第300号において、この60年間の歴史を振り返りました。今年3月末の段階で、医科同窓会は会員数6064名、内本学卒業生は4698名となっております。

この80年間の母校の発展はまさに驚天動地であり、日々飛躍をされていることは今更言うまでもありません。大学や病院の教職員の皆様の並々ならぬご努力の結果が今日の繁栄に繋がったことについては、ただただ敬服するばかりであります。一方、この間、同窓会としても多少ながらも母校のお役に立つべく様々な事業を行って参りました。同窓会員の親睦はひいては結束に繋がり、それは力となります。その力をもってして、母校を支援することは、結局は自分たち同窓生の地位を高めることになることを日々自覚しながら、大学では実施が難しい事業について積極的にお手伝いをして参りました。

さて、いよいよ大学統合が目前に迫って参りました。医科同窓会も名称を東京科学大学医科同窓会に変更予定です。新しい酒は新しい革袋に盛れとはよく言われる言葉ですが、私は、焼き鳥の名店の秘伝の垂れも好きです。即ち、継ぎ足し継ぎ足しを繰り返しながら、先祖の味を守って行くことです。医科同窓会は伝統を守りながらも、新生する母校を今後も全面的に支援して参ります。

1978年第一内科研修医、その後、東京通信病院内科、米国ルイジアナ州立大学生理学教室、国立公衆衛生院、本学医学部公衆衛生学講座、横浜赤十字病院内科、国際医療福祉大学熱海病院内科を経て、現在東京有明医療大学学長。2023年より医科同窓会理事長。



看護同窓会 会長

お茶の水会看護同窓会 会長

佐々木 吉子 *Yoshiko Sasaki*

保健衛生学科看護学専攻5回生・1997(平成9)年卒業

医学部創立80周年を迎えられるにあたり、看護同窓会より謹んでお慶びを申し上げます。医学部保健衛生学科看護学専攻は、検査技術学専攻とともに、1989(昭和64)年4月に開講し、完成年度に合わせて1993(平成5)年に大学院博士前期課程、1995(平成7)年に同博士後期課程が設置されました。看護同窓会はお茶の水会の1つとして、1期生が博士前期課程を修了したタイミングで、1995年4月に誕生しました。学士課程の前身である医学部附属看護学校にも茗溪会という同窓会があり、両者は互いに助け合いながら活動して参りましたが、2021年4月に茗溪会は解散され、志を引き継いでいます。

看護同窓会は、初代二宮彩子会長、二代目江龍伸子会長のもと、会則の策定や会報の発行、茗溪会との共催による年1回の講演会の開催などの礎が築かれ、現在私で三代目となり活動を継続しています。今年で創設29年目を迎え、同窓生は1800名を超えました。卒業生は、本学病院をはじめ、行政、学校、研究機関など多様な場で活躍され、省庁における重要な役割や国会議員、海外を拠点に活動している方も多数おられます。母校で教員をしている私にとっては、授業や学生の実習、研究の相談などにおける頼みの綱であり、助言や新たな知見を与えてくださり、多くの場面で助けて頂いています。また、大学での看護学の学びは、家庭や地域社会で、子育てや大切な人の安らかな最期にも貢献しています。これは、本学看護教育に尽力された諸先生方、医学部という組織力に支えられて実現していることだと実感しています。

看護同窓会は、会員の多くは現役世代ということもあり、同窓会活動への積極的な参画が難しい現実もありますが、母校の存在は皆の誇りになっていると思います。母校の名称が変わっても、私たちは医科歯科の看護マインドを継承し、医療の発展に貢献していきたいと思いますので、これからもご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

1997年3月東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻卒業(看護学専攻5期生)。2005年に同大学大学院博士(後期)課程修了後、教育研究者として母校の看護教育・研究に携わり現在に至る。2018年より看護同窓会会長。



検査同窓会 会長

お茶の水会検査同窓会 会長/
日本医療科学大学 保健医療学部 臨床検査学科 副学科長・教授**関 貴行** *Takayuki Seki*

検査技術学専攻11回生：2002(平成14)年卒業

医学部創設80周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。このような素晴らしい記念の機会に検査同窓会長として寄稿させていただくことを、大変光栄に感じております。

私が医学部保健衛生学科検査技術学専攻に入学したのは1999年4月であり、それはもう25年も前の事になります。国府台キャンパスののどかな雰囲気に含まれながら勉学より部活動に励んだ教養時代、専門科目ばかりで苦勞し多くの再試験を抱えていた湯島キャンパス時代、専用の実験室がなく学部生用の実習室の片隅でひとり実験に勤しんでいた大学院生時代。決して真面目な学生でなかった私ですが思い出の多い、大変有意義な学生生活を送らせていただきました。

私は専攻の11回生であり、学生であった当時は検査技術学専攻の歴史もまだまだ浅い時代でした。現在1年生として在籍されている方々は36回生となるそうで、医学部80年の歴史において専攻の歴史もその約半分に重なっていると考えますと、小さくない感慨を覚えます。さらに言えば、専攻の前身である医学部附属衛生検査技師学校の設置は1962年4月でしたから、東京医科歯科大学医学部における臨床検査技師(当初は衛生検査技師)養成教育は本邦全体に広げて考えても大変な実績を有しているということになります。

ご縁をいただき私が同窓会の役員を務めるようになってから、かれこれ10年になります。役員としての活動を通して技師学校時代の大先輩や一回り以上歳の離れた後輩など、多くの同窓生と関わらせていただきました。多くの方が臨床や研究など様々な分野でご活躍されており、東京医科歯科大学が掲げる基本理念、「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」の達成に検査同窓生が大きく貢献していると実感するところです。

東京工業大学との統合によって東京科学大学として生まれ変わり、新たなスタートを切ることになるわけですが、医学部で学ばれる方々に医科歯科マインドが引き継がれ、今後も素晴らしい同窓生が輩出される事を信じて疑いません。

2003年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科検査技術学専攻卒業。その後、2005年同大学院保健衛生学研究科博士(前期)課程、2008年同博士(後期)課程を修了し博士号(保健学)取得。2008年新渡戸文化短期大学 助教、2009年文京学院大学 助教から2015年同准教授。2022年から日本医療科学大学 教授、現在に至る。

基本データ

【医学部】

■ 入学定員および現員 (2024年5月1日現在)

・学部

		入学定員	収容定員	現員数											
				第1		第2		第3		第4		第5		第6	
医学科		101 {5}	628	108	39	107 (5)	37 (3)	103 (6)	37 (5)	105 (5)	40 (3)	111 (4)	43 (2)	100 (6)	35 (3)
保健衛生学科		90	360	91	86	100	94	92	84	95	93				
	看護学専攻	55	220	55	55	57	55	54	50	55	55				
	検査技術学専攻	35	140	35	30	42	38	37	33	39	37				

*注1 青色は、女子学生を内数で示す。 *注2 例年留年者等も各学年に含める。 *注3 例年休学者は含んでおらず。 *注4| |内は、2 年次編入学定員を外数で示す。()内は、2 年次編入学生を内数で示す。

・大学院

医歯学総合研究科								
		入学定員	収容定員	現員数				
				第1	第2	第3	第4	第5
修士課程	医歯理工保健学専攻(一般コース)	107	214	117	120			
	医歯理工保健学専攻(MMAコース)	15	25	17	13			
	医歯理工保健学専攻(MPHコース)	9	18	9	11			
博士課程	医歯学系専攻	—	—				14	
	医歯学専攻	181	724	200	220	206	321	
	東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻	3	15			1		1
	東京医科歯科大学・チュラロンコーン大学国際連携歯学系専攻	3	15	2		2	3	3
	東京医科歯科大学・マヒドン大学国際連携医学系専攻	3	12	3	2	3	3	
	生命理工医療科学専攻	25	75	28	15	21		

保健衛生学研究科								
		入学定員	収容定員	現員数				
				第1	第2	第3	第4	第5
博士課程	看護先進科学専攻	13	65	13	10	15	15	39
	共同災害看護学専攻	—	4					2
博士(後期)課程	生体検査科学専攻	—	—					

■ 国際交流協定等締結状況 (2024年5月1日現在)

大学院医歯学総合研究科(医学系・生体検査科学系)・大学院保健衛生学研究科・医学部		
アメリカ合衆国	●ワシントン大学看護学部	●ヴァンダービルト大学メディカルセンター(VUMC)
英国(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)	●インペリアル・カレッジ医学部	
オーストラリア連邦	●オーストラリア国立大学医学部	●オーストラリア国立大学ジョン・カーティン医学研究院
ガーナ共和国	●ガーナ大学健康科学部野口記念医学研究所	
タイ王国	●国立がんセンター ●チェンマイ大学医学部 ●チュラロンコーン大学医学部 ●チュラロンコーン大学保健医療学部	●マヒドン大学シリラート病院医学部 ●マヒドン大学ラマチボディ病院医学部 ●プリンセススリーサワーンカワット医科大学、 チュラポーロイヤルアカデミー
大韓民国	●ソウル国立大学医学部	●延世大学校医科大学
台湾	●国防医学院医学部	●国立台湾大学医学部
タンザニア連合共和国	●ドドマ大学	
チリ共和国	●チリ大学医学部	
フィンランド共和国	●セイナヨキ応用科学大学	●タンペレ大学社会科学部
ドイツ連邦共和国	●キール大学医学部	
キルギス共和国	●Osh国立大学国際医療学部	●国際高等医科大学

【建物配置図】

A棟		B棟	
RF	屋上ヘリポート		RF
17F			17F
16F	病棟	長寿・健康人生推進センター	16F
15F	病棟	病棟	15F
14F	病棟	病棟	14F
13F	病棟	病棟	13F
12F	病棟	病棟	12F
11F	病棟	病棟	11F
10F	病棟	病棟	10F
9F	病棟	病棟	9F
8F	病棟	病棟、屋上庭園	8F
7F	図書室	自販機コーナー	7F
6F	手術部	病棟、手術部	輸血・細胞治療センター 6F
5F	血液浄化療法部、がん先端治療部、医療安全管理部、感染制御部	手術部、ME センター	看護部、病理部、生理検査室 5F
4F	外来(小児科、小児外科)、光学医療診療部	外来(合同内科、耳鼻咽喉科、頭頸部外科)、潰瘍性大腸炎・クローン病先端治療センター、神経難病先端治療センター、不整脈センター、栄養相談室、みみ・はな・くち・のどがんセンター	外来(整形外科)、リハビリテーション部、スポーツ医学診療センター 4F
3F	外来(膠原病・リウマチ内科、呼吸器内科、皮膚科、乳腺外科、形成・美容外科、再建形成外科)、 膠原病・リウマチ先端治療センター、快眠センター、プレストセンター、3 階生理検査室	外来(泌尿器科、周産・女性診療科、臨床腫瘍科、緩和ケア科)、 腎・膀胱・前立腺がんセンター、外来化学療法・注射センター、がん相談支援センター	中央採血室 3F
2F	外来(麻酔・蘇生・ペインクリニック科、眼科)	外来(合同外科、呼吸器外科、心臓血管外科、感染症内科)	病棟、外来(精神科、心身医療科)、精神科デイケア 2F
1F	医療連携支援センター、患者相談室、臨床試験管理センター	薬剤部(外来)、医療売店、コインロッカー、総合受付	放射線部(一般撮影、MRI、CT、超音波) 1F
B1F	高気圧治療部、臨床栄養部	薬剤部(時間外受付)、防災センター	放射線部(血管撮影、透視撮影) B1F
B2F			外来(放射線治療科)、核医学 PET・CT センター B2F

4F ― 合同内科：血液、糖尿病・内分泌・代謝、腎臓、総合診、消化器、循環器、脳神経内科、遺伝子診療科、がんゲノム診療科
2F ― 合同外科：食道、胃、大腸・肛門、肝胆膵、末梢血管、脳神経外科、血管内治療科

C棟	
7F	機械室
6F	手術部
5F	ICU・HCU病棟(25床)
4F	材料部
3F	ER病棟(30床)
2F	医療情報部門
1F	総合案内・カフェホール・福利厚生施設
B1F	エントランス・ER部門

D棟	
8F	歯科病棟
7F	歯科麻酔科・歯科手術室
6F	口腔外科・顎顔面補綴外来・言語治療外来・顎口腔変形疾患外来
5F	むし歯科・歯周病科・摂食嚥下リハビリテーション科・歯みがきコーナー
4F	第1総合診療室・第2総合診療室・歯科心身医療科・快眠歯科(いびき・無呼吸)外来(初診受付)
3F	義歯科・スポーツ歯科外来・口腔インプラント科・歯科アレルギー外来・先端歯科診療センター・顎関節症外来・クリーンルーム歯科外来・快眠歯科(いびき・無呼吸)外来・オンライン診療室・オーラルヘルスセンター
2F	矯正歯科・小児歯科・歯科ペインクリニック・口腔健康管理科・和同会歯科・口腔ケア用品店・歯みがきコーナー・保険医療管理部
1F	歯科総合診療科・高齢者歯科外来(スペシャルケア外来1)・障害者歯科外来(スペシャルケア外来2)・息さわやか外来・セカンドオピニオン外来・薬剤部・総合受付・和同会売店
B1F	放射線部(歯科)/歯科放射線科(レントゲン、CT、MRI)・休憩スペース・談話室・理容室

あ と が き

東京医科歯科大学医学部80年史が完成しました。前回は70年史でありましたから、10年という短い間隔での発刊となりました。しかし、この間の変化は非常に大きなものでした。医学部・歯学部病院の統合、当初機能強化棟と言われていたC棟の完成があり、さらに大きな変化として東京工業大学との大学統合もあります。実際には本誌の発行は大学統合の直前となりますが、大学統合に向けた様々な協議や組織改編にむけた準備が進められており、統合後には様々な変化が目まぐるしく起こっていくことと思います。そのような変化があるからこそ、医学部の“今”をきちんと残しておくことが重要なのではないかと考えました。

10年前と比べて、研究分野や診療科の再編などにより、多くの分野が作られ、改編され、名称の変更などが行われてきました。これらがどのように変わってきたかということがわかるような資料を残しておくことは重要です。次の10年を振り返ることになる医学部90年史ができるころには、医学部としてではありますがさらに大きな変化が起こっていることと思います。変化が、さらなる飛躍となり、新たな伝統として築かれていくことを願っています。最後に、本冊子の編集・発行に協力いただいた、日経BPコンサルティング、医学部事務部総務係に、編集委員一同から厚く御礼申し上げます。

2024年8月

医学部80年史編集責任者 秋田 恵一

編集委員 前原 健寿、田中 真琴、齋藤 良一

東京医科歯科大学 医学部80年史

東京医科歯科大学広報誌『Bloom! 医科歯科大』特集号

2024年8月発行

発行

国立大学法人 東京医科歯科大学

〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45

TEL 03-3813-6111(代表)

www.tmd.ac.jp

企 画 東京医科歯科大学 医学部80年史編集委員会
(前原 健寿、田中 真琴、齋藤 良一)

編集・制作 日経BPコンサルティング

デ ザ イン アート オブ ノイズ

印 刷 大日本印刷株式会社

